哲学入門

みえないものがあるんだよ

えっ本当？

見えないものがある

知ってた？

稲持彰三

自分にとって大切なものは他人にはわからない

他者はわからないもの、なので憧れでしかない

人は罪深い、中でも最も罪深いのはこの私である

意外と知らない！がわかる本

目次

◆享受としての身体とは何か

◆差異の中の同一性とは

◆他者をいかにして迎え入れるのか

◆あることからあるものへ

◆存在することから存在するものへ

◆身体と精神の矛盾的自己同一

◆おわりに〜あることからあるものへ

◆はじめに

〜人間の限界を突き破ってしか見えない世界〜

サン・デグジュベリの『星の王子様』に次のような場面がある。

「さようなら」とキツネがいいました。「さっきの秘密をいおうかね。なに、なんでもないこと

だよ。心で見なくっちゃ、ものごとはよく見えないってことさ、かんじんなことは、目に見

えないだよ」

「かんじんなことは、目に見えない」と王子さまは、忘れないようにくりかえしました。

「あんたが、あんたのバラの花を、とても大切に思っているのはね、そのバラの花のため

に、ひまつぶしをしたからだよ」

「ぼくが、ぼくのバラの花を、とてもたいせつに思っているのは…」と、王子さまは、忘れな

いようにいいました。

「人間っていうのは、このたいせつなことを忘れているんだよ。だけど、あんたは、このことを

忘れちゃいけない。めんどうみたあいてには、いつまでも責任があるんだ。まもらなければいけ

ないんだよ、バラの花との約束をね…」と、きつねはいいました。

サン・デグチュベリ＝浅岡２０１３・９０３〜９２５

たくさんのバラを見ている分には、美しいだけだが、毎日バラに水をやると「私のバラの花に」なることをキツネは教えているのである。人は人格的精神で人に接し続けることで心の「肉碑に刻み」こまれるのである。毎日毎日人格的に人に接してこそ、人はようやく相手の心の底に届くのである。相手の心を突き破ることは自己のこころを突き破ることである。見えるものだけではない、見えないものの大切さを教えているのである。生きる意味を教えている。ケアの本質なのである。

人間にはどうしても愛せない、救えない、助けられない自己矛盾、自己分裂を背負っている。それは、身体的生命を持つゆえに自己実現という生命を維持しなければ生きられないからである。どんなに善い人でも、そこには、目に見えない自己中心性が必ず隠れている。なぜなら人間は自己中心性の宿命を背負って生きているからだ。地位、名誉、財産を追って人は誰でも競争によって生きなければならないからだ。そうしなければ身体的生命を保てないからだ。

そこに人は群がり、時には人を蹴落として前へ前へと進んでいく以外にない。振り向いたときには、すでに他者に追い抜かれるからだ。

　つまり、そこには必ずや勝者と敗者が生まれる。いつの時代もだれでも「負い目」の意識を持つ。生きているということはそういう意味では罪である。十字架を背負っているのである。しかし、生きているわれわれ凡人はなかなかそのことに気がつかない。その気づきは、まさにヨブのごとく、突然の不幸が襲い掛かった時に気づくのである。それでも気がつかないのが普通である。ヨブも同様、信仰心が篤く、義人として生きてきた誇りがあった。幸福な家庭、だれもがうらやむ財産と地位とを与えられていた。しかし、家族は襲撃で殺され、財産は没収され、最後には、体までも病魔に襲われた。苦しさのどん底に落とされた。そこでもなおヨブはなぜ私だけがこれほどまでに苦しまなければならないのかと神を呪った。

　しかし、ヨブはその渦中で井戸の底に映った自己を見た時、回心が起こるのである。激震が起きた。それが、人間の限界を突き破った瞬間であった。そこまでいってはじめて見えない世界があることに気づくのである。人間とはそもそも凡夫であり、罪人だったのである。そこまで追い込まれないと気がつかない。それほどまでに人間は自己中心性の欲望に染まっているのである。だからこそ、どんな人間でも、自己の生命、財産を脅かされる事には牙をむくことになる。ましてや、人に善意を向けることなどできない。そこには、人間の醜さが巣くっているのである。

　見えないものが見えるとは、自然的生命では見えないが、人格的生命では見えるということである。自然的生命だけを追い求めたなりの果てが「生ける屍しかばね」なのである。しかし、ザーカイがイエスに声をかけられ、サマリアの女性がイエスに水を飲ませたこ

とで、あるいはサマリア人が半死半生の者をたすけるなど人格的生命を呼び覚まされることもある。虐げられた者が虐げられた者をたすけることができる。それは、自身の奥底にある、神の声を聞いたのである。

◆他者の根源的な意味

「他者は根源的な意味である」（岩田２００５・１２５）と岩田は言う。それは、レヴィナスの言う他者は「希求」でしかないことからきている。他者への運動が絶対的な一方通行の方向性をもっており、それ以外の動機を持っていないことだからだ。つまり、絶対的方向付けであり、それが意味だということなのだ。自己の本質は他者であるということである。私などというものはそもそもない。他者によって私という存在はあるということなのである。自己の生きる意味とは、他者へ向かって存在しているともいえる。他者に対して自己はいつも何ができるかを考えているのである。自分のために生きているのでなく、他者のために生きるということに意味があるのだろうと思われる。

したがって、生きる意味は、他者のためにあるという意味で根源的であり、他者は生きる意味そのものであるということである。レヴィナスは「他者に奉げる一者」という究極的な意味を提示する。自己のためという自己を太らせる運動には生きる意味はない。自己は自己に向かうという邪執を本質的に持つ。「そこはおれが日向ぼっこする場所」なのである。生きるとは自己実現をして、社会的地位を築き生活が保障され、食べていかなければならないのだ。他者のためというよりも、まずは自分のためである。しかし、生きる意味となると自分のために生きる意味などというものはない。他者

のために生きるからこそ、真に生きる意味を見いだすのである。
　他者のために生きる自己そのものに生きる意味を見いだすのだ。「何のために生まれて、何をして生きるのか」の答えの先には「他者のために何が出来るのか」という漠然としたものがある。もしも、自分のための地位や財産や名誉を追い求めて自己を太らせるためだけであったとしたら、そのさきにはかならずといっていいほど挫折が来る。なぜなら、邪執には満足はないからである。その場だけの満足であり、次々に生まれる欲求に限度がない。それと共に、ますます、他者は退き、孤独を強いられていく。そして、ふと我に返った時に「何のために生まれて、何をして生きるのか」という問いがふと湧き上がるのである。神の言葉が沸き起こるのである。
　レヴィナスは自己と他者の関係に神を介在させた。なぜか。「純粋な」あるいは「絶対的な」「善意」でしかない他者に奉げるという運動は「希求」しかないと見たのである。本来の他者は自己の我執からすると常に溝があり、絶対的な壁としての存在でしかない。他者をも隙あらば自分のものにしようとする。自己は世界のすべてのものを自分の中に取り込もうとするのだ。すべてのものの足場を払い、宙ずりにして自分のものにするのである。それが人間の本性である。
　しかし、この行為と真逆の行為があるのか。あるとしたらどこから表れるのかをレヴィナスは考えたのだ。それが他者との関係である。レヴィナスは「他者とは所与ではない」といった。他者は自己の中に取り込めないと言っているのだ。他者はそもそも自己の中に所有できないものなのだ。つまり、支配できない、他者は希求でしかない。一方通行の見返りのない運動なのだ。transfort　pur（トランスフォー・ピューレ）という純粋な移動でしかない。他者に向かって私たちが運ばれるということである。

レヴィナスにあって他者は「顔は絶対的に過ぎ去った不在の痕跡のうちにある」（前掲132）といった。顔から「殺すな」という命令を受け取るのだとしている。そこには理論的根拠なしにただ命令が発せられるのである。命令として神は現れる、または至高性として神が現われるとする。なぜなら、神は常に高みにおり、唯一「否」という存在だからである。カントはこれを「われわれの内にある神」であり「定言命法」であるとしている。この「殺すな」という命令は「他者の人質になる」までの善意を示すということにほかならない。自己とは他者を支え続けるために存在するのだということである。自己の存在の意味は、「他者に奉げる一者」でしかない。「友のために死ぬことにおいて神の栄光が現われる」というのがレヴィナスの究極の答えである。それが、他者は根源的な意味であるということなのだ。

◆他者の弱さが私を呼ぶとは

レヴィナスは他者の弱さが私を呼ぶといった。それは、「他者の可死性（mortalite）」であり他者が死ぬものだということである。死ぬものだという事実が人を呼ぶのだとする。死ぬものが死ぬものに関わることで唯一のもの、ユニク（unique）なものになるとしている。もともと人間はユニクなものではなかった。原始社会はおそらくは集団生活であった。一人ひとりはおそらくは自立ではない共同社会であった。だからこそ家長を中心にした上下関係で成り立っていた。一人ひとりの自立とか自由とはなかったと言えるだろう。しかし、やがて部族間との抗争が激しくなるにつれて共同社会の崩壊とともに、ひとりひとりの自立とか自由とかが確立していったのではないかと思われる。

その過程こそが、引き剥がされたと言えないだろうか。個人が確立されるとともに、自由を手に入れ、孤独を手に入れ、ユニクを手に入れたのである。つまり、自由を手に入れたことで孤独をも手に入れたのだ。自由であればあるほど人は孤独になる。孤独と可死性と自由のうちに引き剥がされたがゆえに、かけがえのないものなのだ。その「かけがえのないもの」と「かけがえのないもの」が「隣人を愛せ」という命令を神から受けているという。それも、他者の顔から命令されているのだとレヴィナスは言う。他者は支配できないもの、その関りは「希求」あるいは「憧れ」だとするのである。

レヴィナスは「疑問のー中にー置くこと」が人が存在することの意味だとする。「引き剥がされた」関係ゆえに、存在するものと存在するものの「間」に、あるいは「溝」に、あるいは「中」に不安があるいは疑問があるいは希求が、その中にうごめいているのである。だからこそ、その命令は、「殺すな」という語りは、言説として自己の内奥から語られるのだとレヴィナスは言うのである。「語ること」「語られること」として、神は現れる。実体はないが、言説として現れるのである。だから神は見えないのである。

存在するものと存在するものとの間には支配できない溝がある。それは、他者の高さであり、希求としての存在そのものでしかない。自己の引き剥がされたことで獲得した自由は、恐るべき我執あるいは邪執を手に入れたのである。それは、ますます自己を太らせる運動としてはたらく。同時にますます孤独になる運動が連動してはたらくこととなる。地位、名誉、財産などあらゆる個人の自己実現の成果の元凶がこの自己を太らせる邪執にある。他者はますます排除され、支配と被支配の関係が構築される。他者との溝はますます深くなる。その関係は「殺すぞ」という支配の語りに偏狂する。

「私に存在する権利があるのでしょうか。世界の中に存在してい

ることによって、私は誰かの場所を奪っているのではないでしょうか。存在の中での、素朴かつ自然な執着を検討すべきです」（レヴィナス＝原田１９８５・１７８）とレヴィナスは言う。その意味することは、私の罪深さであり悪である。その悪を貸借対照として均等にする力こそが倫理であり正義であり善である。そのためにレヴィナスは自己を太らせる運動とは逆にはたらく、自己を限りなく細らせる運動の必要を説く。それが、自己の内奥から語る「殺すな」という命令、言説である。その言説は、他者の顔に現れる「殺すな」であるが、その語ることは、他者からでなく、あくまでも自己の内奥から出る言説であることにこだわるのである。

　ユニクとは自由と共に倫理をも手に入れるのだ。だから、引き剥がされた孤独な他者は、倫理を手に入れたことで、支配から共同の関係の可能性を残したことになる。ただし、その関係は、他者は高みに立つ「憧れ」でしかないことと、自己の悪の自覚を待たなければならないのかもしれない。その元凶は「殺すな」という可傷性であり、その大元が「可死性」にある。その存在と存在の間、「のなか」にこそ、無限あるいは神の出現の余地を残したのかもしれない。あくまでも他者は「憧れ」でしかない本当の意味は、その「あいだ」「のなか」に彼性としての神性の余地があるということなのかもしれない。あくまでも他者は支配できないという倫理性を残している。もしその倫理性のまたは憧れの余地がなければ、存在するものは孤独の中で存在そのものが無に帰すことになる。無限としての可能性と無に帰す可能性の中で、この矛盾の中で苦しむ中で生きていくしかないのであろうか。

「他者の弱さが私を呼ぶ」というレヴィナスの言葉は私の「可傷性」なのである。この「可傷性」こそが、また、罪人としての自覚こそが「他者に捧げる一者」でしかないという自覚につながるのか

もしれない。そこにこそ、存在する意味をレヴィナスは見出したのであろう。生きるということは、我執という邪執と他者を支えるという倫理性との矛盾の中でもがきながら存在しているということなのかもしれない。ある意味では、孤独の中でしか生きられないのかもしれない。その中で、弱さを支えるような機会を持つことが幸福にある可能性なのかもしれない。その支える行為こそ、自己が無になる機会なのかもしれない。

◆パスカルとレヴィナスの共通性

パスカルはその著書『パンセ』で言い表したかったことは、自分がいよいよ死が近づいてきたときに、この世にいた意味を知りたかったのであろうと思われる。人間の本質は何で、納得できる生を全うしたかったのであろうと推察する。人間の本質は欲望にある。その欲望こそが悪である。その欲望を絶ち、真の善を手に入れることで、永遠になれるのだと確信する。彼は次のように結論づけている。

結局、我々を被造物に執着させるものすべて悪だと言わなければならない。なぜなら、それは、我々が神を知っているときには神に仕えることを妨げ、神を知らないときには神を求めるのを妨げるからである。ところが、我々自身はどうであろう。我々は欲望に満ちており、したがって、悪に満ちている。我々は、自分自身を憎まなければならない。そして、我々を神以外のものに執着させるすべての原因を憎まなければならない。このようなわけで、我々にとってただ一つの、そして真の美徳と言えることは、自己を憎むと同時に、

真に愛すべき存在を求め、それを愛することである

パスカル＝西村１９８５・３５３

　結局その欲望を絶つためには、「自分を憎むこと、いやなことをやろうとする習慣を身につける必要がある」（前掲354）とし、人が嫌がる労苦を愛し、それを進んでやる習慣を身につければ、それはやがて善き習慣になると結論づける。それが情念に打ち克つ方法だとする。「私は自分を無であると思えばよいのである」。すなわち永遠を手に入れたことになるという。

愛するものと憎むものとの転換をはかる必要がある」それは、人が嫌がる労苦をも愛するのだとする。パスカルは、人間とは弱い者である、なぜなら、「我々の本性は堕落しており、確実なものを知ることができず、このため我々の行動はすべて、不確実なものを目指しての行動にならざるを得ない。・・・（中略）我々は確実なものは知らないが、確からしいものがあることは知っている。誰もがそれに賭けることができるのだし、また誰ひとりそれを拒否することはできないからである

パスカル＝西村１９８５・３２７〜３２８

　私たちが、生きているかぎりは、邪執はとれない。「そこは俺の日向ぼっこをする場所」であり、腹が減ったら食うしかないからである。それが人間の本性だ。自己実現するために食うのでなく、食うために自己実現をするのが人間だからである。その上に立って考える主体性は、所詮は確実なものをつかみ取ることはできない。不確実性を目指して生きていると言わざるを得ない。しかし、その不

確実な中でも、確実らしい生き方はあるらしいことを知っている。それは、自己の欲望とは反対の生き方である。その手掛かりを与える力が他者であることをレヴィナスは見抜いたのかもしれない。

他者であり他性であり、彼性 (il)　でり、神であるのかもしれない。そのレヴィナスの本質は、パスカルとの共通点とも言える。レヴィナスは存在することを「疑問の—なかに—置く」ことだと言っている。そのなかとは、自己と他者とのあいだに置くことでもある。自己は他者によって疑問のなかに置かれるのである。その置かれることが、確実性に近づくことなのだ。不確かな中でしか生きられない人間にあって、その間に置くことによって、「逆対応」が起こるのであろう。我(le moi) はすでに世界を担っている「第一の人格」である。この我と言う主体性から、自己の存在条件を無にする者が「疑問の—なかに—置く」他者なのだ。それが「存在するものの—間—を無にすること」なのだ。自己の存在条件を放棄する主観性である。言葉を換えれば「存在することの検討が生起するのであろう。

◆パスカルからみた人間の自己矛盾

聖書に次の一文がある。「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、所有の誇りは、神から出たものではなく、世から出たものである」と。「肉の欲とは感じる欲であり、目の欲とは知る欲であり、所有の誇りとは支配する欲である。「欲すれどもできない」私たちは、我欲には勝てない。それほどまでに人間は無能であることを神は知っているのかもしれない。しかし、この神の偉大さを感じることは人間にはできる。そこに信仰の意味があるといわなければならない。パスカルは「自己本来の欲望を抑え、相手の快の

ために奉仕するためことであり、しかもその最終的な目的が自己の快にあるという転倒して行動」（パスカル＝原田２０００・２１４）であるとしている。

おそらくこの文面は、レヴィナスが一番に感じていたことではないか。なにしろ、「他者に奉げる一者」でしかないといっているからである。自分を太らせる邪欲とは真逆の運動、つまり、自己を限りなく細らせる運動である。それは、口にくわえたパンを引きちぎって他者に与えることでもある。存在するとは言葉を換えれば「我」ということだ。「我（le moi） は、原則として、その第一の人格から身を引き離すことはないのです。つまり、我は世界を担っているのである」（レヴィナス＝原田１９８５・１４２）という。そこに、主体性から主観性という運動がはたらくというのだ。つまり、西田の言う「逆対応」がはたらくことでもあるのだろう。

レヴィナスの言う「存在するとは別の仕方」がはたらくのだ。「私に課せられるこの重荷は、単独者の最高の栄誉」（前掲144）だと。なぜ栄誉か。「私は自分で責任を負う限りにおいてのみ、その我なのです」（前掲１４４）と。我は世界を担っているからとしか言えない。ドストエフスキーは『カラマゾフ』の著書の中で次のように言っているのと同意であろう。「私たちは誰もが、すべての人に対して、あらゆる面ですべてのものごとに対して、罪人ですが、なかでもいちばん罪深いのは、この私です」と。いかに、存在が罪であるのか、しかしこの罪は逃れられないという意味で重荷を背負っているのだ。その重荷こそが主観性である。

そこに、人間の人間性たる救いを見る。主観性から他者への責任という「至高の我」が出現するのである。人間として、「私には拒否することができない」という責任である。それが罪を贖う我ということなのかもしれない。「肉の欲、目の欲、所有の誇り」こそが

人間の欲の本質であり、生きることの本質である。この欲とともにある「我」とは存在することの意味そのものなのである。その「我」を「至高の我」に向かわせる「逆対応」こそが、存在することの生の儚さ、死の上に存在していることの弱さへの主観性なのである。生きるということは、きわめて、「動的平衡」という危うさの中に「我」を主張することのなのだ。そこに「至高の我」が見える。あくまでも「動的平衡」の中で出現する「我（le　moi）」を引き剥がすことなのであるのかもしれない。

◆パンセから見える人間の本質

　人間の欲望について際限のないことをパスカルはその著書『パンセ』のなかで次のように言っている。

しかし、その起源をよくよく検討してみると、私的所有の正義を保障するような根拠はなにもないことに気がつくのであろう。〝その犬はぼくのものだ〟と言って、哀れな子供たちが争っていた。たまたま路上で見つけた子犬を〝ぼくのもの〟とか〝君のもの〟と言って区別する根拠は何もない。キニク派のディオゲネスは、あれほど地上の富や社会制度を軽蔑していたのであるが、その彼でさえ、アレクサンドロス大王に向かって、〝ここは、私の日向ぼっこの場所だ〟と主張した。この子供じみた傲慢さ、あるいは支配欲に、全地上の掠奪の、したがって私的所有の、起源と象徴を見ることができるのである

パスカル＝西村２０００・１０６

「その犬はぼくのものだ」とか「ここは、私の日向ぼっこの場所だ」という言葉ほど人間の本質を言っていることはない。人間のこの本質を探ることこそがケアの本質を語ることでもある。法律や制度に先だってこのような人間の本質を明らかにしない限り、どんな法律でも制度でもこの日常の人間の行動の本質を見ない限りは、人間の争いや平和は訪れることはないであろう。ソロモン王がかつて全世界の金銀はおろか全地上を掠奪してもなお、欲望は満たされないばかりかむなしさが自我を襲う結果になった。逆にヨブは、財産や家族を奪われ、病魔に襲われてなお神を呪った。パスカルはそのことを次のように言っている。

ソロモンとヨブは、人間の悲惨を最もよく知り、よく語った点では同じであるが、前者はかつて最も幸福な人であり、後者はかつて最も不幸な人であった。経験により前者は快の空虚を知り、後者は苦の実在を知った。この二人は、いすれも人間の悲惨を知り、神への信仰にその救いを求めた。・・・（中略）しかし、このような出発点の相異にもかかわらず、ヨブとソロモンは同じような悲惨の認識に到達し、同じように正確な人間理解を示しているのであるが、これはどのような理由によるものであろうか。それは、彼らが、別々の経験を通していながら、同一の悲惨の本質を見いだしたからである。すなわち、この世においてはいっさいが悲惨であること、快もまた苦であることを彼らは見た

パスカル＝西村２０００・１３３〜１３４

ヨブは「たとえ私が正しくとも、私の口は罪あるものとする」に至った。ソロモンに至っては際限のない欲望は気晴らしとしての快

でしかないことを悟るのである。人間のこの我欲の罪は、自己矛盾の中で生きていくしかないことをいっているのだろう。この矛盾した人間の本質に迫ったのがレヴィナスである。レヴィナスは存在すること自体に罪があると言った。「私には存在する権利があるのでしょうか。世界のなかに存在することによって、私は誰かの場所を奪っているのではないでしょうか。存在のなかでの、素朴かつ自然な執着を検討すべきです」（レヴィナス＝原田１９８５・１７７～１７８）とし、存在するとは別の在り方を求めたのである。

　存在自体に罪があるのだから、それを帳消しにする手段は、つまり会計上の貸借対照によって均等にならなければならないとしたのである。それは、内に向かって自己を太らせる我欲でなく、自己の我欲を無に向かわせる、自己をやせ細らせる外に向かっての方向を考察したのである。その結論は自己は「他者のために、他者に奉仕する一者」として支え続けるしかないとしたのである。なぜなら、我欲は生きている限りなくならないからだ。そのためには他者と共にあることが必要である。他者の他性こそが倫理だからであろう。自己の自我を否定する存在が他者である。他者の他性が自己の他性に責任を起立させるのだ。他者の他性と自己の他性は見えないものに支えられているのである。

　人間の本質の限界を見抜き、その受動性に対して、創造主からの救いしかその答えを見いだせなかったとしか言えない。はたして、人間は善か悪かの瀬戸際を求められているのであろう。西田は善の研究で「絶対矛盾的自己同一」のなかで、この矛盾を乗り越えようとした。自己の深奥にある「無限」を求めたのかもしれない。罪を拭い去る道として、レヴィナスも西田も神への応答の中に自らの責任を見いだすしかなかったのかもしれない。罪への償いとして・・・。

◆存在していることは最も個人的なこと

　レヴィナスは存在することは最も個人的なこととして次のように言う。

実際、存在しているという事実は最も私的な〔個人的な〕ことがらです。つまり、実存は私が伝達し得ない唯一のことがらです。私は実存を語ることはできますが、しかし、わたしの実存を頒かち与える〔ともにする〕ことはできないのです。孤独は、したがって、ここでは存在しているという出来事〔事実〕そのものを特徴づける孤独としてその姿を現すのです。社会という問題は、存在論の彼方にあるのです

レヴィナス＝原田１９８５・74

　人がこの世に存在するとは、きわめて個人的なことであり孤独なことであるという事実がある。なぜなら、自己は自己同一性を保とうとし、その根本に、我執（エゴイズム）が根を張っているからだ。それが唯一性としての自己保存本能である。命というものは、他者の命を奪って命を保とうとするという本能があり、その上に主体性が出来上がるのだろう。そういう意味では実存するという、生きて存在する自己は孤独を背負って存在しているともいえる。命は他者の命を奪うことはできても、自己の命を頒かち与えることはできないのだ。

私はまったくの独りである。それ故、私のなかの存在、私が実存しているという事実、私の実存することこそが、まさしく自動詞的な要素を、すなわち、志向性や関係性をもたない何ものかを構成するのである。実存することを除けば、すべては存在相互の間で交換され得る。その意味では、存在するということは実存することによって孤立するのである。私が存在している限り、私は単子（モナド）である。私には戸口も窓もないのだが、それはまさに実存することによってなのであって、私の内にある伝達し得ないのは、実存することが私の内にあって最も個人的なものである存在の中に根が張っているからである

レヴィナス＝原田１９８５・76〜77

　実存することは唯一性として自己保存性として孤立する。それだけでなく「その場所は俺の場所」でもある。他者の排除であり、他者の支配である。そこに存在することの罪または罪悪感が生ずる。その罪悪感は、存在において、同時に逆対応がはたらく。主体性に対する主観性である。主張に対する責任である。自同性の受肉こそが主観性であり、主体性の回心である。それはあたかも他人の顔貌が「他人に仕えるように私に命じる」のである。「他人の責任に対してさえ、私に責任がある」に至るのだ。なぜなら、「我は（le moi）〝第一の人格〟（一人称）から身を引き離すことはないのです。つまり、我は世界を狙っている」（前掲142）からである。「他者のために罪を贖う」ところまで責任を持つにいたるのだ。

　それは、自己の存在を放棄するような存在であり、「無私無欲」になることでもある。つまり、存在する者の間にある利害関係を無に（除去）することだ。これが「存在するとは別の仕方」ではたらく、内向きから外向きへの逆方向の運動なのだろう。貸借対照の原

理と言える現象がはたらくのだ。「人間として存在すること、それはあたかも諸々の存在のうちのひとつの存在として生きることではなく、人間的な精神によって、存在の諸カテゴリーが覆される、つまり〝存在することとは別の仕方で〟ということのうちに、生きること」（前掲１４３）なのである。「存在することの疑問が生起」することを示すものなのだ。

　個人を引き受け、その他人の責任を負うのは、この私である。人間的主観は誰もとってかわることのできない「至高の我」であり、専らその責任は私に課せられている。この重荷は単独者としての「最高の栄誉」である。譲り渡すことのできないわたしの自己同一性であるところの最も個人的なことなのである。ドフトエフスキーは言っている。「私たちは誰もが、すべての人に対して、あらゆる面ですべてのものごとに対して、罪人ですが、中でもいちばん罪深いのは、この私です」と・・・。あくまでも主観的な出来事なのである。

◆他人に対する責任

　レヴィナスは他人との関係は責任という重荷を背負っているというのが根底にある。その件で著書『倫理と無限』で次のように言っている。

他人に対する責任ということのなかに、窮極的には、他人の死に対する責任がある、と私は思います。他人のまっすぐなまなざしは、もっとも深い意味でさらされていること、死にさらされていることではないでしょうか。顔貌はその正直さのなかで、死によって〝至

近距離から„ ねらわれているものなのです。顔貌のうちに要求として語られるものは、静かに、与えることと奉仕することへの呼びかけ—すなわち、与えることと奉仕することへの命令—を意味しているのですが、しかし、それ以上に、また、それを含めて、たとえ過酷な事態に直面するようなことになっても、他人を独のままに打棄てておいてはならない、という命令を意味しているのです

レヴィナス＝原田１９８５・１７３

なぜに他人の死までも責任をとらねばならなのか。存在することは「誰かの死を準備することなしには生きることはできません」（前掲１７６）と。殺すことなしには生きることはできないという宿命的な罪をすでに持っているとレヴィナスはいうのだ。そういう意味では、他者に対して死にさらされているもの同士が「負い目」をもって生きているともいえないか。あるいは、他者の顔貌から「ねらわれている」ともいえる。それは、他者の死に対する畏敬であり、畏れである。生きるということは誰かの場所を奪っていることなのだ。「そこは俺が日向ぼっこする場所だ」（パスカル）が根底に流れているのだろう。

私たちは、常に我執によって存在者を認識し自己同一性の中に取り込む。息を吸う、吐くという無意識の動作を繰り返して、世界のあらゆるものを奪いとっているともいえる。もちろん、この行為は他者との関係にも通じている。いつも、自己は他者をも自己同一化しようと試みているのだ。しかし、他者は同一化できない、他者だけは支配できない。なぜなら、人は「自由」を持っているからだ。自由に対して自由を超えることはできない。よく人は「命がけでやれ！」という、その意味するところは、他者に向かって命を差し出せということなのだ。別の言い方をすれば、「他者の身代わりにな

れ」ということなのだろう。

〈無限者〉は、顔としての〝隣人〟に従うよう私に命じるのだが、私が〝隣人〟に近づけば近づくほど、この命令は容赦ないものと化す。・・・（中略）ほかならぬ私の応答のうちに、私はこの命令を見いだす

レヴィナス＝合田２００８・３４０

「私はあなたの御用にたつためにここにいます」（岩田2008:138）。これが「無限」の出現である。「無限の栄光が己を輝かす」（前掲１５９）のだ。神の啓示であるが、「神の命令は、だれも命令を発する者が存在しなかったかのごとくに、おのれの内部からやってくる。それは、私が私の口を通してわたし自身に命ずることにより、私のこの語りの中で、己を現すのである」（前掲１５９）と。

　神はあくまでも人間をとおして現われるのだ。しかし、神は人間には見えない。見た人もいない。それは、あくまで、人を通して出現するからだ。それも、自己の内部からやってくるという意味で、啓示（受肉）なのである。

　人は有限者であるゆえに、無限者と死という概念でつながっており、それは、コインの表と裏の関係のごとく、「絶対矛盾的自己同一」として位置している。我執という自己同一運動のなかに自己同一を破壊するような動きが出現するのだ。我執の中にいつも負い目がある。それが命令に転化し、責任として出現するのかもしれない。存在するとは他者の簒奪であるゆえに重荷を背負うことなのである。誰もが罪人なのである。カラマゾフのゾンビ長老が言った

「もっとも罪深いのがこの私だ」ということなのだ。

◆存在するとは別の在り方

　レヴィナスの言う存在するとは別の在り方とは結局何だったのか。その答えが彼の著書『倫理と無限』にある。「そこは俺が日向ぼっこする場所だ」にすべてが集約されている。つまり、存在するとはレヴィナスに言わせると世界の簒奪である。「世界の中に存在していることによって、私は誰かの場所を奪っているのではないでしょうか」（レヴィナス＝原田１９８５・１７７）と言っているのだ。つまり、存在するとは世界の簒奪である。その簒奪に対して別の在り方とは、内に向かう同一性でなく、外の向かう同一性のことである。

　外に向かう同一性とは何か。「無私」であり、自己を空にする志向性であり、他者の重荷を背負う在り方である。そこにレヴィナスは存在の意味を見いだしたのだろう。「日向ぼっこをする場所」を提供する行為である。エゴイズムとの反対の方向である。はたしてそんなことはできるのだろうか。岩田に言わせると、「自己保存と自己主張と自己拡張がひしめき合っているのが、存在の世界」（岩田2008:42）だと言っている。それに反して存在することは「存在の彼方」でしかない。生きるということは「エゴイズムと自己犠牲という二つの生き方の緊張の中で、いつのその緊張に苦しみながら生きるという」（前掲42）ことなのだと。

　自己矛盾の中で生きているというのは「やましさの意識をもって生きているということ」である。世界に対して、他者に対して責任を持つということである。自己と他者との関係は「引き剥がされた」ゆえに「対面」した在り方でしかないというのがレヴィナスの

主張である。「存在することは実存することによって孤立する」（レヴィナス＝原田１９８５・77）とは何を意味しているのか。つまり、存在すること自体は孤立ではないが、生きて存在することで人は孤立するすると言っているのだ。「そこは俺が日向ぼっこする場所だ」（前掲）は実存の在り方である。エゴイズムゆえに孤立するしかないのだ。

　そこに「対面」の意味がでてくる。「対面」して存在しているゆえに、自由な存在であり、いつでも、超越者としての他者の意識下にあるということである。「やましさの意識」とはこのことである。「究極的には、他人の死に対する責任がある」（前掲72）とまで言う。それは、対面（または近さ）してあるがゆえに他者の死は、自己の死を呼び覚ます。「顔貌は正直さの中で、死によって至近距離からねらわれているもの」（前掲１７３）である。それは「与えることと奉仕することへの命令」（前掲１７３）「他人を独りのままに打ち棄てるな」という命令である。語り、語られることだ。他者の命令が自己の肉声となって語られるのである。それは、まさに、他者の孤独が自己の孤独に呼応しているからである。そういう意味では、対面しているからこそ、結び付けられているとも言える。

　他者の呻きが自己の呻きに呼応して、他者の命令が「殺さないでくれ」という声となって自己の肉声となって反転するのである。「少なくとも、誰かの死を準備することなしに生きることはでき」ない。存在するとは誰かを犠牲にして生きつづけることであるとするなら、常に他者に対して目覚めていなければならない。絶えず迷妄から醒めていなければならない。つまり存在することは決して安心が与えられることではなく、重荷を背負うという責任があるということが「対面」して存在していることの意味である。

こうして対面することは、見えないものが「息吹き」となって語られる。「啓示」として神が現われることになる。神は他者の通してしか現れないからだ。「啓示とは超越者のこの世界における受肉（incarnatio)」(　岩田１９９７・２０５)でしかない。「自己とは自由である」ことが根源的事実である。つなわち、自分自身に対して全責任を負っているのである。自分で自分の存在の仕方を決定しなければならないということである。「人間が単独者であり、かけがえのない唯一者であり、絶対の根源者であり、実存であるということは、すべて自由であるということのうちに収斂するのである」（前掲１８８）のだ。

このように自己の存在が他者の存在に分かちがたく結合していることが明らかになる。「存在の肯定」とは、他者からの善意の贈与である。このように自己が存在するとは「自己の存在を他者に認めてもらおうとする努力である」。「存在するとは、別の在り方」とは、対面しているゆえに、その間に〝結び目〟を作らなければ存在しないこととなる。常に迷妄から醒め、他者に奉仕する存在として対面しなければならないのだ。存在するとは「他者に奉げる一者」でしかないという自覚である。存在し続けるとは、ある意味他者の場所を奪い続けることである。その借りを帳消しにするためには、善意の贈与しかないのかもしれない。そうしなければ貸借は対照にはならないのだろう。

本来の自己は孤独である。存在それ自体が孤独だからである。「孤独のうちに殺さないでくれ」と叫んでいる存在である。なぜなら、存在とは他者の簒奪でしかないからだ。存在するとはこのように「存在することの重奏的肯定」でしかない。他者との関係は一方通行の希求でしかないからだ。「対面」して存在しているがゆえに、その間を埋めることはできないのだ。ただ善意を捧げ続けるし

かない関係を意味しているのだ。「自由な人格の心は秘密の奥社であり、他者が心を開いてくれるのでなければ、そこへの通路はない」（岩田１９９７・２０３）と。

　まさに啓示（incarnatio)としてしか関係性は開けはない。それは「良心の声、愛の心、死や挫折による有限性の自覚など」（前掲209）でしかないからだ。それは理性による納得の決断でなく、「光を発するイエスの言行」のように出会いの体験だからである。「イエスの言行そのものの放つ光が唯一の自己証明」であるような「良心の声」が自己の存在証明たりうるのかもしれない。存在するとはこのように別の在り方こそが自己の根源的な存在証明なのである。他者に対格しているこの本質こそが、他者の存在の肯定が、自己の存在の証明になりうるという逆対応が自己の根源的在り方なのである。

　つまり、自己は他者の肯定的証明を与える以外には自己の存在証明はないといってよい。自己とはレヴィナスの言う「他者に奉げる一者」でしかないのかもしれない。レヴィナスは次のように言っている。

顔貌は、その正直さのなかで、死のよって〝至近距離から〟ねらわれているものなのです。顔貌のうちに要求として語られるものは、確かに、与えられることと奉仕することへの呼びかけ　―すなわち、与えることと奉仕することへの命令―を意味しているのですが、しかしそれ以上に、また、それを含めて、たとえ過酷な事態に直面するようになっても、他人を独りのままに打棄てておいてはならない、という命令を意味しているのではないのです。おそらく、これこそが社会性の土台である

レヴィナス＝原田１９８５・１７３〜１７４

世界の平和の根源がまさにここにある。社会の政治や法律や倫理以前に、自己と他者のこの倫理的関係性がある。存在することの関係がある。自己の存在証明とは、ただ、他者への存在証明を送り続けることでしかないのである。〈責め〉の無限性こそが私の唯一性、あるいは「単独性（sangurarite）」なのである。

◆他者の本質

レヴィナスの他者の意味には二つある。一つは他者とは切り離された憧れである。もう一つは絶対者としての他者、汝であり、彼性であり、彼である神ということである。神は人間を通して現れるという。しかし、神を見た者はいない。ただ、痕跡だけを残して立ち去るのだ。その痕跡とは、他者の顔に「裸の顔」にあるという。神は「存在の彼方」として「訪れ（ヴィジタジオン）」として出会うという。そして、自己と他者との間は事実、間であるゆえに「引き剥がされ（absole）」たという意味での〝間〟をさしているのだ。それは別の意味で〝深淵〟なのである。その深淵との間に、自己と他者の神秘が隠されているのではないだろうか。

私は他者によって私となるという在り方で存在している。つまり、深淵を行き来しているのだ。レヴィナスはそこに自己の他性を見る。他性が自己であり、唯一性としての自己はabsole（引き剥がされ）て存在している孤独者でもある。そのからくりは、自己実現を強いられるためのabsoleであり、病に倒れ劣化してやがて死す弱さを抱えたabsoleでもある。最初の強さを持ったabsoleは、孤高としての強さを強いられる。後のabsoleは弱さを持つ存在として、他

者との往来を許される関係を持つ。つまり、他者との関係を自由に往来する関係とは、自己が無に曝されたときに許される関係である。強さでは絶対に開かない扉が弱っているときに、または死にかけているときに開くのであろう。

　そこに、レヴィナスは「存在の彼方」に出会う道が開かれるとしているという。この存在の彼方とは、思い出すことのできない過去であり、「殺すな」という命令のうちに現われる、絶対的道徳的命令がでる。レヴィナスはその著書『存在の彼方』（別訳では『存在することから存在するものへ』）で「語ること」「語られたこと」という意味不明はことがしきり出てくるが、おそらくはこの「殺すな」というロゴスの内に現われる言葉ではなかろうかと思われる。その点を本文で次のように言っている。

〈語られたこと〉を言表する〈語ること〉は、感性的なもののうちにはじめて生起する〝能動性〟であり、この〝能動性〟がこれをあれとして定める。けれども、判定と判断、主題化と瞑想としてのこの能動性は、まったき〝（他者）のために〟（他者の代わりに）としての〈語ること〉のうちに不意に出来する。徴しないし記号としての自己の純然たる贈与—まったき〝自己の記号化〟—純然たる自己表出—全き真摯さ—まったき受動性としての〈語ること〉のうちに。ただし、〈語ること〉のうちに

レヴィナス＝合田２００８・１５４

　レヴィナスは難解であり、謎であるといわれる。それは、この「語られる」ことだけをとっても理解不能だ。いったい誰が語るのか。誰に語るのか。それは岩田のレヴィナス論を紐解くと分かりや

すい。レヴィナスのその奥底には神があるからだと岩田は言う。神が人間を通して語っているのだとすると理解されやすい。何を語るのかは、「汝殺すなかれ」という言語（ロゴス）として現れる。
もっと深く言えば、ことの初めは他者の「呻き」からである。この微かな呻きが自己の感性に触れてロゴスとして現れる。だから能動的なのである。呻きを聞いた人は自己の感性から言語化して不意に現れる。自己の命令としてきわめて能動的である。
　その自己の心的はたらきが〈他者のために〉（他者の代わりに）という行為に変わるのだというのだ。その行為は贈与でしかない。「自己の記号化」とは絶対的命令として「汝殺すなかれ」という神が「語られたこと」が自己が「語ること」に豹変する。それが、受動性から能動性に変わることなのである。absoleという引き剥がされた間に神が仲介する余地が宿ったのである。それがレヴィナスがユダヤ人としての経験から出てきた「存在の彼方」であり、人間の生きる意味であり、存在することから存在するものへの願いだったのである。

◆存在の彼方として生きる意味

　人間は弱い者を食べて生きているという。自己保存として存在しているという事実がある。しかし、それだけでは動物と一緒だ。自己拡張の世界で生存競争を強いられ、自己と他者が争い、やがて破滅するという世界でしかない。しかし、人間として生きるというのは単なるエゴイズムだけで生きることではない。善として生きるためにこの世に生まれたのである。レヴィナスはそれを「存在のかなた」として生きるということであるといっている。存在するということは、ある意味欲望の充足である。ただそれだけでは、動物以下

の化け物である。しかしある意味この様な「やましさ」の意識を持って生きているということである。

　わたしは善として生きているなどという人は逆にいかがわしい人間であるといっているようなものである。存在するということは「やましさ」と同時に、それを否定するような運動である自己犠牲として生きるということが求められているのである。なぜ求められているかと言うと、他者がいるからである。唯一者としての自己は、自由を保障され、ある意味では、自己保存だけでなく自己主張と自己拡張を繰り返す。しかし、他者が存在によってこの自由は見事に打ち砕かれる。なぜなら、他者も自由な存在だからである。

　逆に言えば、他者のおかげで際限なく拡張するエゴイズムにブレーキがかかるのである。下手をするとエゴイズムにまみれた化け物になり下がる恐れを有している。しかしそのバケモノは他者によって攻撃され、孤独のうちに死すべき者となる。すなわち、他者との関係は善として生きる関係を前提としているということである。この善とは、自己犠牲を強いられるということである。それは果たして可能なのだろうか。レヴィナスの言う「存在のかなた」とは、存在を無にするような運動である。果たしてそのようなことが人間はできるのだろうか。その答えを求めるべきレヴィナスは誰よりも真剣に考えた人である。なぜ真剣に考えたか。ユダヤ人として生き、ナチスによって家族は皆殺しにされたからである。

　平和の究極の姿は他者との良好な関係性の構築に見たのである。その他者との関係は、自分を犠牲にして自己を無化するような運動に見たのである。他者との良好な関係は、「憧れ(Desir)」であるといった。なぜなら、他者は認識できないからである。自由な存在としての他者は、自己の中に取り入れることはできない。私の自己同一性を見事に拒否する、いつも私より高い存在である。ゆえに、憧

れでしか関係性は築かれないのである。では、具体的にどのようにして関係性を構築できるのか。

　世界に存在している他者は、自己同様に存在拡張のただ中で生きている。しかし、一方では、有限な存在として、無限でない儚さを共有している。強さと弱さという矛盾の中で苦しみながら存在しているのである。「やましさ」と「儚さ」を共有している。その共有こそ自格でなく対格として存在していることを意味しているのである。レヴィナスは引き剥がされたがゆえに対格して存在しているのが人間の根源的在り方だといっているのである。つまり、すでに、自己の中に他性が張り付いているのである。その他性の心象に触れるのである。

　どんな時に触れるのか。半死半生になった他者との突然の出会いからである。何のゆかりもない異邦人としての他者は、この様に苦しみの中で出会うのである。この微かな他者の呻きに答えることがその関係性の端緒であるとレヴィナスは言う。しかしこの呻きはあまりにもか細いため、強さだけの人間には聞こえない。しかし、もしこの声が聞こえたならば、この呼びかけに答えるのが人間の在り方である。そこに善の息吹が現われる。生きる意味とはこのような行為なのかもしれない。自己犠牲という逆向きの行為は、下手をすると、自己の生命を落とす行為である。しかし、偶然の他者の苦しみに出会った自己の行為は、すでに自己の意識以前の基体の息吹から出る行為である。「存在のかなた」からの行為である。自己の他性とはこのように神が一瞬憑りつくような行為であり、その神は絶対に姿を現さないのである。

◆私は隣人の責任

レヴィナスは隣人の責任をも責任があるという、二重の責任を負っているという。なぜか。それは、主体性がそのまま自我ではなく、自同性のうちに取り組まれているという点で主格でなく対格しているという。初めから責任を負っており回避することができない。主体性の意味とは、対格であるゆえにすでに自己の中の他性の触発であり、他性の近さである。「主体的なものは受苦するのだ」とレヴィナスは言う。それは、「隣人の顔は、一切の自由な同意、一切の協定、一切の契約に先立つ還元不能な責任を、私に対して意味する」（レヴィナス＝合田２００８・２１２）といっている。

　顔の現前は、覆い隠すことができない「裸の顔」であり、そこには老化と死とが、または、それによる苦痛、または呻きがむき出しになっていることである。それを見た自己は、対格しているがゆえに、自己の深奥からの他性（神）からの声が聞こえるのである。「汝殺すなかれ」と。「存在の彼方」から聞き取れないほどのかすかな音を覚知する。それが「主観性」であろう。このレヴィナスの言う「主観性」は「傷つきやすさ」であり「善意」であるという。なぜなら、「汝殺すことなかれ」という微かな声はこの「主観性」によってしか聞くことはできない。なぜなら、「傷つきやすい」ほどの受動性だからである。

　顔の現前において現れる他者（異邦人）とは孤独に苛まれ、飢えと苦痛にあえぐ「汝殺すなかれと」叫ぶものである。その対面において、根源的分離された者として出現するのが、「主観性」としての呻きを自己の内奥からの声を聞くことである。それは、顔を通して語りかける
嘆願である。その嘆願は自己の内奥から聞こえてくるという意味で「主観性」なのである。その主観性こそ自己を死の彼方に向かわせる志向性である。他者の顔はまさに死に曝されているがゆえに、対

面して、自己の内奥に呼びかけるのである。汝と言って彼で終わる古代ユダヤ教の祈りに由来するかのようである。

存在そのものに内包する意味に「存在と違って」が内包されている。存在そのものはあらゆる他性を排除する。あらゆるものを自己の中に取り入れる我執によって認識された者となる。ところが、他者は逆向きにはたらく。自己を解き放し、おのれの場所を譲り、存在の彼方へ通り過ぎていく。これがまさに善意であり、傷つきやすさである。存在の彼方とは、自己の他性、自己の老化、自己の無化、自己の死への内在化の現出である。対格、対面しての汝は、すでに我ー汝の関係の中にあり、我執と善意との逆方向の志向性を宿した自己同一性と言えるのではないだろうか。

◆容器の本質と内面性の本質

レヴィナスは飢えについての享受に関して次のように言う。

この「内部」は両義的なものとして二つの「内面性」を含意している。それは空間的形態を有した「容器」の「内面性」であると共に、他人を自己の自動性に同化したがゆえに自己自身に即して展開される〈自我〉の「内面性」である」

レヴィナス＝合田２００８・１７９

飢えることの満足とは、パンにかじりつくことそのものである。まさにそれは「生の享受」そのものである。人間は容器としての身体（質料）を持ち、「質料は質料化」する。食べ物は身体によって吸収される。同時に、自我の感受性を自同性として満足させる。という両義性をもつ。

こうして人間は、身体と精神という身体性と主観性を持つために「享受」は両義性を伴っている。しかし、この主観性は身体性に遅れてやってくる。身体が基体であるゆえである。基体とは主体性を含有しているからにほかならない。「どんな反省、どんな自己還帰にも先立って、享受は、享受を享受する」（前掲１７９）飽食することは、認識に先立って生そのものを享受するのである。この感受性は、食べて満足するのみでなく、同時に自我の満足を伴うことに意味を持つ。この自我の満足こそが可傷性の条件となるとレヴィナスは見る。

　身体性の飽食に対する貪欲さこそが我性の満足そのものである。しかし、この自己同一性は、感受性を伴うゆえに、他性の可傷性を呼び覚ます。「他人の要求に気を配ること」を喚起させる契機となる。「飢えたものに汝のパンを与え」「貧しき者を汝の家に迎え入れること」（『イザヤ書』58）「質量の質料化」が「他のために」「他の代わりに」に転じるとレヴィナスは言う。なぜそのように言えるのか。レヴィナスは、「感受性とは他への暴露である」（前掲１８２）であると言っている。「感受性の暴露は、存在性の努力の一種の逆転」（前掲１８２）であるという。「感受性の無制限の受苦をすでに前提としているからだ」（前掲１８２）としている。

　飽食するこの満足は受動性の享受であるからだ。それは、イニシアチブという主体性を欠いているがゆえに、いつでも可傷性に転じるのだ。レヴィナスはそのたとえとして「イメージを追い求める狩人の能動性から獲物の受動性へ」（前掲１８３）転ずるという。つまり、飽食という行為は、自己満足だけにとどまらない。飽食は受動性であるゆえに常に満足に終わりを与えないのだ。「迫害された者の動揺」を同時に自同性に取り入れているのだ。「他人による脅迫」に転じるのだ。

レヴィナスの言う「拘束された自由」とは「有限な自由」の内包である。主体性の選択の自由に対していつでも基体の「有限な自由」に巻き込まれているのである。「母性、可傷性、危惧—は、自己統覚よりも広範な筋立てのうちで受肉の結び目をつくる。この筋立てにおいては、私は自分の身体に結び付けられるに先だって他人たちに結び付けられている」（前掲１８６）と言う。自己と他者は引き剥がされた故に対格として存在している。それは、レヴィナスに言わせれば記憶を絶した古の記憶からきているのだ。すでに生まれる以前に他者に結び付けられているがゆえに、自己と他者は可傷性として関係づけられているのだ。
　レヴィナスは「他のために」「他の代わりに」は「自分のために」という自我の逆転を示している。自我は自己同一性のはたらきであり、この自同性は受動性ゆえに、可傷性を伴う。ゆえに「自分のために」という自己満足はイニシアチブを持たない故に、主体性の動揺によって可傷性に転じ、「他の代わりに」「他のために」という主体性が出現するのかもしれない。存在することは対格としての近みにあり、受肉を起点として結び付けられた自己は、他者とともにあったのである。

◆存在することから存在するものへ

　私の所有する身体は時に歩くことが快感だったりする。それは、まるで身体がないように感ずるくらい心も軽くなる。時にそれによって、歩き疲れたり、足が痛くなったり、身体全体に疲労を感じたりする。時に大病を患い、自らの所有の重荷に押しつぶされてしまうときもある。主体（自意識）は時に身体のこの重荷に占有される。主体よりも先に。つまり、差異であり、距離である。レヴィナ

スはこの距離によって現在そのものを構成する言った。「自我の内なる他」（レヴィナス＝合田２００８・２８９）である。

　存在することはただ単に存在するのではない。所有することで存在するものになる。何を所有するのか。それは身体であり重荷である。それゆえに、存在することと存在するものとに差異が生ずる。主体である存在することは意識である。意識は基体である身体に依存している。いうなれば、私が私であることに遅れて到来することが存在することの私の在り方である。私と所有する身体とは一致していなければならないのだ。私が存在することは所有することでもあるともいえる。世界のあらゆる存在者（存在するもの）は私が所有することではじめて存在するものになることになる。存在することは必ずしも存在するものではない。そこに所有という主体がはたらくこととなる。

　他者との関係は、両義性を内包している。主体性は基体に遅れて存在しているこの基体は、苦痛という重荷を背負っている。他者も同じような構造を持ち、この重荷という苦痛が自己と他者を結びつける契機となる可能性を持っている。ということは主体に先立って、他者のうめきを聞いたならば、自己は基体の方から、主体に「語られる」。つまり、他者のうめきは、自己のうめきに呼応して、まるで自己のうめきとなって主体的に関わることになるのである。レヴィナスは他者の呼びかけによる自己の呼応を自己の「責任」という言い方で言い表している。これが、他者への「善意」であり、人間が存在することの根源的状況だとしている。

　つまり、存在するとは、引き剥がされたがゆえに両義性を内包しているのである。それが、個々の唯一性である。唯一性ゆえに、存在は常に対面してあるのである。我々に顔を通して歎願している存在として対面しているのである。最初から両義性を有しているとい

える。この「主観性」が両義性を持っていることになる。このレヴィナスの言う「主観性」は我執による主観性と、逆方向にはたらく自己を無にする運動である。この運動が「善意」である。逆方向であるゆえに自己同一性の崩壊させるはたらきを持つ。この点についてレヴィナスは「絶対的分離である自己と他者が生物的連帯性という契機を発条にして分離と死を乗り越えようとする観点である」（岩田１９９７・１５３）。もしわれわれが遠ざかるこの意味の足音に耳を傾けないならばこの契機の発条はない。望まれざる異邦人として直ちに身を引くように身構える。主観性とはこのような存在の根源的表れである。

　自己は常に自己を守ろうと身構える。自己は自己の中に隠れる。他者との対面はそのようにはたらく。しかし、他者のかすかなうめきが聞こえたならば、生物的な連帯性を契機として、主観性の息吹が湧き出るのである。これが主観性の両義性である連帯性といえる。レヴィナスの言う「存在とは違って」存在することの神秘性がここにあるのかもしれない。「善意」の運動とは、このように生物的連帯性によって、主体の重荷を契機として、「自我の内なる他」を呼び覚ます。自己とはただ単に存在することではなく、存在同士の神秘性によって善意の息吹を分かち合うのである。ここに生きる意味が隠されている。

◆「主観性」と「傷つきやすさ」

　　レヴィナスは「主観性」とは「傷つきやすさ」であり、「責任感」であり、「善意」であるといった。なぜか。自己同一性という内に向かう運動とは真逆の、他者に向かう、一方通行のうんどうである。「このような主観性は初めから倫理的実存としてしか出現し

えない。自己と他者が根源的な分離として出現すること、それが対面（face a face)の出現である」（岩田１９９７・１５０）である。これこそが人間が存在することの根源的状況だとするのである。つまり、他者とは自己にとってどういう関係にならなければならないか。「対格」としていつも気になる存在なのだ。もっというなら「可傷性」として姿を現すのだ。

「対格」として向き合って存在しているがゆえに、贈る運動と受け取る運動があるということである。受け取る運動が自己同一性である。逆に贈る運動が「善意」であり「希求」または「憧れ」である。このことをレヴィナスは「人質において他者の身代わりになるまでに自己を巻き添えにさらすこと」だとする。この運動こそ、自己同一性の崩壊である。内向きの運動から一転して、外向きの運動である。自己同一性を「主体性」というなら、逆向きの運動を「主観性」といった。「主体性」が能動性であるとするなら、「主観性」は受動性であり、この受動性こそ自己がますますやせ細り、空虚になり、やがては死の彼方へ移りゆくようなうんどう性だ。これこそが「善意」ということになる。

レヴィナスにあって、主体性は我執を原動力として、世界のあらゆる存在者を宙づりにして認識し、手の中に収める。そして自己は際限なく太り続ける事になる。その太り続ける自己に対して逆向きの力が必要になる。なぜなら、やがて際限なく太り続けた先が独裁者、全体主義者として世界を支配し、すべてを抹殺するまでに至るからである。その逆向きの力こそ受動性である。なぜそのような運動が起こるかと言えば、切り離された他者ゆえに「対面」あるいは「対格」として対になって安定を保とうとする運動が本質的に含意しているからとしか言えない。なでなら、切り離されたという意味で、常に敵対者としての関係と、常に「希求」するような献身のよ

うな矛盾した運動を内包していることになる。
　この矛盾を「絶対矛盾的自己同一性」と捉えることもできる。または「動的平衡」ということもできる。この「他者に奉げる一者」のような善意の運動は、自己同一の手前で「逆対応」の力がはたらく。それが「傷つきやすさ」であり「責任」である。他者の呻きを聞くことで、他者の弱さに触れるのである。強さという主体性に対しては能動性がはたらき、暴力的に対面する。その一方で、弱さの対面は受動性がはたらき、「他者に奉げるしかない一者」を自覚するのである。これが「受肉」することである。このことに人生の意味が内包されているし、生きることの意味が示唆されているとも言える。人生の意味とはもともと向こうからやって来るとフランクルが言った意味にも通じる。
　生きる意味とは、他者の呻きへの応答なのである。存在する者への責任ということなのである。存在するとは自己を太らせる我執ではなく、自己の我執を無に向かわせる運動なのである。それこそが人が人を支える行為であり、ケアの本質である。生きる意味とはこの微かな呻きを聞くことだったのである。しかしこの呻きはあまりにも微かであるために、ふつうに生きていたのでは聞き取れない。私たちにこの聞く耳を養う課題が課せられているのである。

◆存在するとはそれ自体が罪なのか

　ヨブでさえ理解できなかった罪とは何か。レヴィナスは存在することが悪であり罪なのだとまでいった。基体は世界の中で包み包まれ、つくりつくられ生きている。基体とは人間の身体を持った総体であり、受苦であり、受肉である。身体は意識以前に息を吐き息を吸い、食物を食べ排せつする。主体性に関係なくという意味では、主体性は常に基体に遅れていることを意味する。主体の能動性は受

動性を本質に持つがゆえに、我執は受動性によって能動性に行着く前に他性に阻まれるという構造を持つ。
　つまり、自己の主体性は、身体の痛みによって阻まれる。あた、身体は病み衰退しやがて死す運命に対して抵抗することはできない。そういう意味では二重の受動性を有している。主体は世界に対して包まれて存在している。その主体の主体性は日の当たる場所を占有する。基体を我執によって影響を受けるのである。日の当たる場所を奪うばっかりでなく、食べ物を奪い合うという行為を有している。「生きる」あるいは「存在する」とはこのように罪を追うのである。悪を内包しているともいえる。
　さらにいえることは、意識と基体との間の差異こそが「善」あるいは「善意」という行為に至る可能性を内包しているのである。レヴィナスはこの点について次のように言っている。
「意識の手前にあって、一者の受動性、一者の責任、一者の苦痛は、起源に先だつ〈善〉の支配をこうむっている」（レヴィナス＝合田２００８・１４２）と言う。つまり、善または善行は自己の自己同一の手前ではたらく運動である。主体性には届かない、我執に至らない構造を有している。意識の手前で意識は「自我以上に条件づけられている」のである。人間学は「思考可能なものは残らず意識を通過する」というコギトに対してレヴィナスは警鐘を鳴らす。
　この点についてレヴィナスは「他人に奉仕する責任によって告発される自同性なのだ」といっている。「自同性の中の他性としての生気」であり、身体性の受苦を契機として発生するこの善行は他者へ向かう贈与そのものである。同の中の他としての生気づけからきている点では、自同性が他性に触れることで「逆対応」の運動がおこるのではないだろうか。それは、基体としての身体性は病苦や衰退という受苦に会う。それは他者も同様であり、その受苦した他者

の現前でおこる自己の他性の生気ではないだろうか。自同性のこのように我執という内に向かう運動と外に向かう運動の、いわば「逆対応」する2つの運動を有していることとなる。

つまり、主体性は善と悪の両義性を備えていると言える。主体性の内へ向かう運動が我執であり、その手前で逆転する運動が善意ということになる。存在するとはこのように他者に対して善と悪の運動がおこることになる。その主体性は基体という身体性の両義性を伴って現れる。意識に先立つ運動であるといえる。レヴィナスは、人間学の意識を通して世界をとらえるハイデガーを筆頭とした存在論を否定する。意識はすべての存在者を宙づりにして認識し、世界をわがものの様に折檻する。ところが、そこからこぼれ落ちる他性の行為に対して認識できないのだ。

存在するとはそれ自体が罪を犯していることでもあり、それに抗う善行を有していたともいえる。それは、人間が世界に対いて受動性として存在しているがゆえに、世界に対して包まれていると同時に包み返していることでもある。また、世界に対してつくられ、つくり返している存在していることでもある。だから人間は、世界に対して共存し続けることができるのかもしれないのだ。

◆善はなぜ存在に先立つのか

存在とは、あるいは存在するとはそもそも何か。主体あるいは主観が基体（身体性）にいつでも遅れているということから出発する。基体（身体）が存在するとは世界に投げ出されること、または生命が誕生することである。主体はその時点では他者に委ねられたまったくの受動性としてしか認識されない。1年の早産としてこの世に生まれ、自己の意識に上るのは数年後である。つまり、その時

点でようやく自己は世界への出現を認識するのである。レヴィナスはそのことを折り返しと表現し、「認識」は常に遅れてやって来るという。それを反省と言っている。なぜ反省なのか。
　主体である私は「同一性のエゴイスティックな自発性」であることからきている。そのエゴイスティックな自発性こそが世界と関わり世界を同化するのである。世界を同化するとは「存在者に意味をあたえ、存在者を対象として了解する。・・・（中略）・・・世界という〈他〉はかくて〈同〉化される」（熊野２０１４・１４６）ことからきている。つまり、主体性の同化とはこのようにエゴイスティックなものであり限りにおいて、支配と被支配の関係の何ものでもない。つまり、そもそも存在するとは悪を内在していることなのである。それゆえに内省（反省）がつきまとうことであるのかもしれない。
　その悪の対局が善であるとするなら、自己の内に向かう運動の真逆の運動こそが善であるといえる。ということは、他者に向かう「善意」こそがそれにあたる。その善意は存在に先立っているとはどういうことなのか。レヴィナスは「私は自分の身体に結び付けられるに先だって他人たちに結び付けられている」と言う。身体は始めから受肉しているとは、受苦していることであり、生身であるゆえに身体は病み衰えやがて死ぬという、執行猶予された罪人と変わりはない。自由をも期間限定である。したがって享受も、幸福も不幸も、善も悪でさえも同様である。
　存在することがそもそも悪であるということの裏返しが善である。つまり存在しないこと、無限であり、超越といえる。または、限りなく無に近づく運動である。自らの同一性の力ではなく自分の存在を打ち消すような運動である。それをレヴィナスは「他者に奉げる一者」と言った。最初から悪である人間が、存在の「在り難

さ」を帳消しに収支のバランスをとるとするならば、他者に対して一方通行の善意を贈る以外にない。贈与以外の何ものでもない。レヴィナスは次のように言う。

一切の能動的な引き受けに先立って、一切の約束—それが承認されるにせよ、破棄されるにせよ—に先立って、隣人は私と関わる。私は隣人に結び付けられている。が、隣人は何の予告もなく最初に到来する者、比較を絶した者である。したがって私は、締結された一切の絆に先立って、隣人に結びすけられているのだ。

レヴィナス＝合田２００８・２０８

　この様に、他者である隣人は私の指示に先立った召喚であり、強迫である。「隣人に接近することで、私はただちに隣人に仕える。私は隣人に対しすでに遅れており、遅刻したという罪を負うている」（前掲２０９）のである。「主体的なものは受苦する」のだ。自由という享受を受けるゆえである。「他人のために身代わりになること」は「存在の彼方」で意味がまさに誕生することである。存在するということは身体性の受苦ゆえに認識の彼方にあることである。彼方の行為こそが善であるということなのだ。

◆善悪に先立つ受動性

レヴィナスは善悪に先立つ受動性について次のように言っている。

自分の犯した過ちから自分の不幸が生じたのであれば、これらの不

幸を説明することもできたであろうに！ヨブはこう言う。ヨブの不実な友人たちもヨブと同じように考える。何も罪を犯していないのなら、まっとうな世界では応答する必要などありえない、と。だからヨブよ、自分の過ちを忘れてしまいなさい！けれども、みずからの投企の所産ならざる世界のうちに遅れて到来する、そのような主体性は、みずからの投企として投影し、みずからの投企の投影としてこの世界を扱うことがない。主体性のこの様な〝遅れ〟は無意味なものではない。この〝遅れ〟は主体性の自由に諸々の制限をもたらすのだが、これらの制限が単なる欠如に帰することはない。みずからの自由を超えて責任を担うこと、言うまでもなく、それは世界の単なる一帰結にとどまることではない。それは宇宙を支えることなのだ。

レヴィナス＝合田２００８・２８２

　つまりこれは何を言いたいのかというと、『ヨブ記』のヨブでさえ自由のもつ本当の意味を理解できなかったことを言っているのである。人間がもつ主体的自由とはそれ自体が罪であるということなのである。なぜなら、人間の主体性によってつくられた世界は「投企の所産」である。ゆえに、常に遅れてやって来る主体性は、二重の意味で罪を犯しているのである。しかし、遅れてやって来るゆえにその罪が分からないのである。ヨブのように何も罪を犯していないと言い張るのである。しかし、世界から見れば、生まれる以前に罪を犯してきたのである。そればかりか生きていること自体が罪である。ゆえに自由であるということは責任がすでにつきまとっていたのである。

　存在することの重荷が自由を凍てつかせる。存在位することは「外部を内部とし、内部を外部化すること」である。身体であるゆ

えに常に外部に曝され、外部を内部化しながら、内部を外部化している。内部の外部化とは、自己の手を使ってモノを作ることである。世界をつくることである。世界のあらゆることをものを自己の手中に収め、自己のそうして獲得した能力を生かして世界をつくっていく。世界に対して「つくりつくられる」関係にある。さらにいえば、存在することの重荷とか不安とかどこからくるのかわからない悲しみとかの精神性は、他者との関係性のなかで、「包み包まれる」関係にある。

その関係は、身体は享受であるからであるともいえる。享受とは、「裸形である身体」ゆえに「世界に養われ」なければならない。なぜなら、身体は空気を吸い、ものを食べ、水を吸うのである。「他なるものを同化し、私であるものを他化」していく。それは、私は消化し、排せつするからである。息を吸い息を吐くからである。身体であるとはこのような受動性を意味するのである。また、身体であるとは、世界に曝されていることから来る、病による苦痛が伴う。存在とはこのように享受と苦痛をともなう。逃れられない受動性という性格を有する。

私であるとはこのような「同一性のエゴイスティックな自発性」である。自発性とは自由を含有している。エゴイズムとは自由であることの裏返しでもある。世界の存在者に意味を与え、自己の中に取り入れる。自己はこの自由によって世界の存在者を自己の中に取り入れて手中に収める。これが主体性の主観性というエゴイズムである。同時に、自己実現力である。人間であるとは、このように、自己を実現するために、世界を手中に収めるのである。アレテ―に生きることが幸福の追求であるとアリストテレスは言った。しかしこの幸福は、真の幸福ではない。なぜなら、エゴイズムという我執を内包しているゆえに世界を傷つける。具体的には、人や物をわが

ものの様に手の中に収める、支配の中にあるからである。このような力による支配はやがて、世界の方から疎外される。なぜなら、他者も同じようにアレテ―に生きているからである。他者もアレテ―であるとは、自己に対して否という存在でもある。この自発性を問いただす、エティク（倫理）な存在こそ他者の異邦性である。

世界に到来する他者こそが、自己を自己たらしめる。唯一無二の自己を構成する。なぜなら、世界を折檻する自己の自同性は、ゆうなれば、全体性にほかならない。すべての世界を自分のものにするということである。あらゆるものを自己の中に取り入れようとする。しかし、唯一その同一性に抗うものこそが他者である。世界を手中に収め、世界から拒絶される。その運動のさなかで自己が折り返される。自己が自己に気づくのである。これが唯一性であり存在の存在たる証である。つまり、他者によって自己の存在を明らかにされるのである。

◆神は人間を介して命令する

他者は絶対的他者である。絶対的という意味は、absoluというラテン語からくる解き放されたという意味を持つ。他者は絶対的という時、神の介入が忍び込んでいるのである。人間の自然的本性である自己中心性を拒むものである。他者は自己の思惟をはるかに超えて存在しているという意味で超越である。神は決して姿を現すことがない。神を見た人はいない。そういう意味では神など存在しない。しかし、他者の行為に神が現われる。それは自己の自己同一性への攻撃にほかならない。

自己は自己同一性によって自己を実現し、世界をわがものの様に蹂躙じゅうりんする。しかしやがてその行為は破たんする。なぜな

ら、他者がたちはだからである。他者との共存なしには生きていけないからでもある。他者は自己中心性である我執を徹底的に嫌う。なぜなら、他者もまた、自己実現しながら生きていかねばならないからである。力に対して力で反発するのである。「主観性」にレヴィナスは視点を当ててabsoluである絶対的自己から逆対応の力がはたらいているを明らかにするのである。

「主観性」とはそもそも自己同一性を根源とする、世界掌握の能力であり全体化の力である。しかし一方ではこの「主観性」は他者から切り離された単独者（absolu）である。根源的な分離として出現していることを意味し、孤独な実存者である。自己と他者が根源的に分離していることは「対面」した存在ということを内包している。つまりは、「対格」として存在していることを意味している。孤独な実存者は、対面し対格して安定するように存在していることを意味しているのである。

対面し対格して存在するとは、どういう自己と他者の関係が生ずるのだろうか。レヴィナスは「傷つきやすさ」であり「責任感」であると言った。受動性の受動性としてはたらきを意味する。自我の自己同一性の崩壊である。「主観性」は自己同一性としての主体性であると同時に、「傷つきやすさ」という不正という逆の力がはたらくのである。それは対格しているが故の孤独な実存者の「悲しさ」なのかもしれない。つまり、「主観性」という世界掌握力は同時にabsoluという神性が忍び込んであるのである。

このabusoluからの神性こそ「責任感」であり「善意」である。この善意こそ「他者の身代わりになるまでに自己を巻き添えに曝す」（岩田１９９７・１５１）である。対格による「主観性」こそが自己責任と自己同一という逆対応が共存していることになる。自由と責任が共存している所以でもある。レヴィナスは存在と存在者

との両義性を説く。それは。存在することは自己を語ることであり、存在者から語られることでもあるという両義性を意味する。他者に対する責任という語りは、存在者からの指示に先立ち、自らの主観性からの響きである。谺としての響きの様に神からの語り（責任）が自己の意識から生ずるのである。

◆彼性に支えられた自己とは

　ケアとは他者を支える行為であるとするなら、はたしてその行為自体がどのような関係の中で立ち上がってくるのか。そもそも人を支える行為という善行は可能なのかどうか、本質論にさかのぼって考えてみたい。そのための一つの接近の方法としてレヴィナスの『存在の彼方』を中心に展開してみたい。レヴィナスは他者への責任、他者の身代わりという極限にまで迫った他者論の研究者である。レヴィナスは存在への接近として、「感受性」「可傷性」に着目した。

　現象学的に人が存在するとは、「動的平衡」の中でかろうじて存在している身体性をもっている。ハイデガーは宙づりになって振動しながら世界に投げ出されて存在しているのが人間だと言っている。宙づりとは、存在根拠がないという意味である。人は自分の意志で存在したわけではない。もともと、主体的に世界に出現したわけではなく、どこの誰だかわからないがまったくの受動的に「投げ出された」ともいえる。もちろん、両親によって生まれたという意味では全くの私生児ではないが、その本質は両親にしてもわからないうちに出現したという意味である。

　そして、振動しながらとは、瞬間から人間を切り取ってみた姿である。身体はそもそも細胞で出来ている。細胞は生成と死滅を繰り返し、一時として立ち止まることのない「動的平衡」としてある。

そういう意味では、振動しながら存在している。死と生とが共存しながら存在しているともいえる。生命とは細胞というきわめて動的な中で、生と死を経験しながら、徐々に細胞の数を減らしながら衰退しやがて死が訪れるという身体性をもっている。その中で、細胞が傷つき、細胞が衰弱し、病魔に襲われ苦痛という「可傷性」を持つ。

自分自身は自己を形成しえない。自分自身は絶対的受動性によって既に形成されたものであり、この意味において自己自身は、どんな能動的引きうけをも麻痺させる迫害の犠牲者である。

レヴィナス＝合田２００８・２４６

ゆえに「基体は、対格の相のもとに、自己を自己自身として暴露する」（前掲247）のである。「自らの谺こだまのなかで聴取しうる音」（前掲２４７）なのだ。つまり、レヴィナスは、基体とは主体性（自分自身）から切り離された借り物「仮面」でしかないと言う。「つねに暴力的でかつ早すぎる死によって打撃を与えられている」（前掲249）存在である。ゆえに、「他人に対する責任を示すものとしての魂、感受性、可傷性、母性、質料性を起点とすることではじめて、自己性の根拠づけ不能な自同性は自我、私、自分自身といった用語で表現される」（前掲２４９）のだ。

つまり、自同性は他性との関係で成り立っている、根拠を持つのである。自己同一性とは他者を基点として成り立つもので、自我は他者からの感受性、可傷性としての魂であり、魂であり、質料性であるということである。他者とはもともとつながっていたにもかかわらず、無理やり切り離されたという意味を持つ。そういう意味で

は、単独者、唯一者、孤独な実存であり、全体化できない絶対者という性格を持つ。しかし、もともと、自他同一の存在である意味から、対面であり対格として他者は「みずからの谺のなかで反響する音の如きもの、波のうねりのなかで結び目であ」（前掲240）ったのだ。

この自己と他者の関係は、「憧れ」としての結びつきである。それゆえに他者の声は「かれ性」として「私との関係に入ることなしに私と関係する」。切り離されているために超越者との関係が生まれるのだ。他性はかれ性に変容して自己を支えているのである。

◆感受性の主体性の両義性とは

感受性についてレヴィナスは次のように言っている。「母性としての身体は受動性にしてかつ断念である」。身体は受苦として主体性に影響している。具体的には、歯が痛む、お腹が痛いことから日々の疲労までもすべて受苦であり、受肉である。つまり、主体性としての自己中心性と感受性としての身体性は相反する両義性を持つことになる。この両義性こそが、自己と他者との関係に両義性があることを意味しているのである。つまり、他者は自己にとっては壁として溝がある。しかも、絶対的な断絶がある。人間は本来、自由を持つ者として他者はいつも高みにいる。つまり支配できない関係であり、憧れでしかないことを意味しているのだ。

この自己と他者の関係に対して、いかにして自己と他者との関係は好意的、善的関係をとることができるのかということが問題となる。自我の主体性の運動は「自己に捲きつき」内側に向かうベクトルを示す。このベクトルが自己の両義性に触れて感受性は「逆対応」がはたらくのである。この「感受性の主体性は自己に戻ること

なき自己放棄」（レヴィナス＝合田２００８・１９２）となる。つまり、主体性は自己中心性の内向きのベクトルを持つが受苦としての身体性を持つことで、「自己に反して」という外向きのベクトルがはたらく。特にこのはたらきは、他者の顔を通して作用する。レヴィナスは「裸の顔」として、その可傷性として意味しているのだ。

すでに受苦している主体性と見ることができるのである。つまり、主体性は内と外へのベクトルをもつ。能動性と受動性という矛盾の中でベクトルは行きつ戻りつしながら存在しているのである。身体も精神も常に動きながら「動的平衡」のただ中で存在しているのである。このことをハイデガーは、人間は、振動しながら宙づりになって投げ出されて存在しているという意味で現存在が人間のあるべき姿であるといった。振動とは揺れ動く人間の姿であり、投げ出されて、宙づりになってとは存在根拠の無いという意味であり、自己の意志とは関係なく生まれ、死ぬという宿命を持つという意味である。

このことをレヴィナスは、受動性の中の受動性として存在しているのだとしている。つまり、主体性が唯一の能動性のように見られるがしかしこの主体性ですら、見せかけの能動性であり、基体としての身体に左右されているのである。さらに、その主体性としての私の意志で生まれを了承し、死をも了承して実行しているわけではない。その主体に関係なく、目に見えない存在者の手中にあるという意味で二重の意味での受動性をはらんでいるのである。この主体性は変容して、「他人のために身代わりになる一者」として自己の意志に反して作用するのである。主体性こそ受動性であるという両義性を持つ存在であることを意味している。

従って、主体性こそが感受性であり、ケアの本質を意味している

のである。自己中心性であるからこそ、「逆対応」として逆向きのベクトルが同時にはたらいていることを意味しているのである。自分のためには他者のためにという逆向きのベクトルが同時にはたらいていることを意味している。人はケアされたいがためにケアするのであり、ケアすることでケアされるという以前に、すでに存在することそれ自体にケアがあり、本来受動性としての主体性であるゆえに「裸の顔」を持つがゆえに、近さがケアを呼び覚ますのである。

◆遠くて近い他者とは

　他者は現象世界に存在すると同時に現象世界を超えている、還元されないものであるとレヴィナスは見る。それは存在と同時に、超越であることを意味する。端的に神聖なものと同時に、弱さをむき出しにした存在者である。弱さをむき出しにしたとは、「私を孤独の中に置き去りにしないでくれ、死の中に置き去りにしないでくれ」（岩田２０１１・93）と叫ぶものである。そこにこそ他者との関りが生まれるのだ。隣人になるとは、この苦しみに逃れようもなく関わることである。
　他者との関りは、無限との関りでもある。無限なものと接する自己は、不当な自己を自覚するのである。なぜなら、無限とは超越者のことであり、神である。一方自己は、自己中心性の我執によってあらゆるものを不当な力によって自分の中に取り込んできたものである。そういう意味で自己の不当を顕わにするのである。自由である自己であるゆえに存在欲求を持つ自己は疑問に付されるのである。この高きものに対してもし関係を持つとすれば、「低い方から善意を捧げる」しかない。なぜなら、善意しか他者は受け付けない

のである。なぜ受け付けないか。悪意は超越者にとってはもっとも憎むべきものだからである。

存在するとは、ある意味では自己中心性により不当を繰り返すことである。人は存在をさせられ不当を繰り返すことで生きていくしかない存在である。そういう意味では受動的な存在である。受動性の中で存在欲求を繰り返す存在である。不当者であり、不正を繰り返して存在しているに過ぎない。それは、他者との関りを避ける傾向を示す。孤立的傾向を有している。孤独の中で生きていく存在者でもある。本来他者にとって不当な存在が自己だからである。自己中心性の存在欲求の最たるものが自己実現である。こうして人は、自己のアレテ―（有能性）を最大限に発揮して生きていくしかないのだ。

ナルシストとして孤独であることを知らないという存在傾向を示すのである。孤独の中で死すべき存在であることを意味している。その意味から、存在するとは、傷口を開けたまま世界に投げ出されたものであるということである。この矛盾を「絶対矛盾的自己同一」と西田は言っているのである。傷口を開けているという意味では、他者に巻き込まれているということを意味している。死すべき存在という受動性は、他者に巻き込まれるという受動性を含有しているということである。他者との関係は、主体性（自己中心性）からくる不当性とその真逆の善意を捧げるという他者の傷口へのケアとして存在しているのである。

このことは、他者に巻き込まれて存在しているという意味で、自己の中の他性の存在を呼び覚ますのである。このように存在するとは、負としての存在要求と同時に、逆の力としての存在贈与がはたらいているのである。この存在贈与こそが他者の傷口を癒すケアにほかならない。このように矛盾した存在として他者に対する関係を

持つ。つまり、人が存在する意味とは、存在贈与である。私が生きる意味とは、このように、他者のためにかかわる在り方である。レヴィナスはこのことを「他者に奉げる一者」と言った。

「遠くて近い他者」とは、このように他者との関係の本質をついている。他者は超越者であると同時にすでに半死半生のものとして存在しているに過ぎない。矛盾して存在している関係性と同時に自己の中でも矛盾して存在している。常に自己の中で逆の力がはたらいていることを意味している「動的平衡」の内にある。自己同一性という力は、他者の関わりで、逆向きの力がはたらく。これは、自己同一という自己満足が常に一時の満足にすぎない反作用がはたらくのと似ている。自己同一の中では決して永遠の満足は得られない。永遠の満足は存在贈与という目に見えない善意を他者に送り続けるしかないという限りないケアの行為でしかないのかもしれない。人が生きる意味とはこういうことである。

◆non-in—differenceとは

レヴィナスの言うnon-in-differenceとは他者との関係を示し、それは二重否定であるとする。一つは私と他者とは絶対的に異なっていることを表している。もう一つは「無関心でない」という意味にもなる。「私は同化（支配）できない他者である」（岩田１９９７・１２１）non-in-differenceを直訳すれば、中身は違うが違わないという二重否定である。私と他者は違って当たり前。でも、違わない（同じ）と言ったことであろうと思われる。それは、大燈国師の言った「億劫相別れて、須臾も離れず、尽日相対して、刹那も対せず」と言ったことに似ている。他者は離れているが、いつもそばにいるのである。

西田は「逆対応」と言って自己と自己を超えたものの関係を言った。それは、神との対応でもあり、他者との対応でもあり。自己の中の他性との対応でもある。それは、離れているけれども常に関係を受け、相互に関係し合っていることを意味しているのである。自己から他者への関係は、他者からの影響も受けているということである。「存在を支えているものに出会う」（藤田２０１５・１５３）のである。この極限の対応こそ「阿弥陀の五劫思惟の願」（歎異抄）の親鸞の言葉である。生まれかわり死にかかわる生死の世界をさまよう凡夫であるという自覚」（前掲１５４）である。

　つまり、他者の神性に出会うのである。西田は自己の中の神性に出会うことだと言っている。自己の中の他性であり、自己の中の奥底にある神性こそが、自己の自覚である。渡辺は井戸の底にある自己の闇を見なければわからないと言った。自己の闇とは、虐げられた異端者しかわからない近況なのかもしれない。自己の闇を見るとは、見たくもない自己の不正に目を凝らして見ることにほかならない。そこに何を見るのか。自己の不正とは何か。人間は日向に住まうものであるということである。限られた日向はまさに他者を簒奪しなければならないのである。つまり、そこからはみ出した人間がいるという事実である。自己を実現するとはこのような行為である。

　人間が生きるためには、この様に食うか食われるかという本質が横たわる。自己中心性でありエゴイズムである。自己は内側にベクトルが向いているともいえる。なぜなら、生の本質だからである。それは身体性から来る。身体はまさに腹が減ったら食う。喉が渇けば飲むしかない。西田はこのことを「身体あって精神がある」と言い、基体としての身体は当然精神に影響を与えている。その根源が我執であるといえる。生きるということはつまり、他者の簒奪であ

り、罪である。おまけに、自己の都合の悪いことはすべて闇に葬る。誰も見ていなければ、きわどいことをしているのも人間の本質である。

だから、都合の悪いこと、自分に不利になることは隠すのである。この覆い隠された恥部こそが不正である。どんな高尚な人間でも持っている。生きているということの血なまぐさささである。これこそが罪である。しかしどんな人間もこの本性を覆い隠す。それが人間が世界に存在することの究極の在り方である。しかし普通の人間は気がつかない。その典型が「ヨブ記」にあらわれている。ヨブは賊に襲われ家屋敷はおろか財産や家族までも失う。まさに不幸のどん底に落とされる。経験で品行方正に生きてきたヨブだからこそ、神を呪った。それでも神は天罰だと言い渡す。もがき苦しんだ果てに、自己の奥底に行き当たる。まさに井戸の底を見たのである。何と醜いのか、なんと罪深い人間だということを悟るのである。

この内側に向かうベクトルこそが生の本質である。だから、人間の歴史は、まさに血を血で洗う戦いの歴史である。究極は他者は邪魔ものである。支配以外の何ものでもない。では、外向きのベクトルとは何だろうか。それを示したのがレヴィナスである。人間は他者とは相いれない絶対に違う溝や壁がある。一方では、他者に支えられて生きる存在でもある。なぜなら、他者との関わりなしに自己などというものは存在しないからにほかならない。当然世界に放り出された自己は、他者なしでは生きてこれなかったという事実が横たわる。生まれた赤ちゃんは母の支えなしには一寸たりとも生きていられない。自己とはこうして、他者の支えで生きてこれたのである。

つまり、他者との外向きの関係とは、支配の反極である。すべて

の力は究極は支配でしかない。それは、とどのつまりは暴力でしかない。他者に対して力ずくで扉を開けようとしてもなおさら頑なにしまってしまう。それをもしこじ開けようとしたならば、力によって相手の息の根まで奪うしかない。その時もう相手はいないのである。扉は、自ずから開くのを待ちつづけなければならないのである。人間は本来の自由とはそういう意味である。もしこの自由が無くなれば人間でなく、単なる支配、被支配の関係になり下がるだけである。

　そのためにはどうするか。自分自身を棄てなければならないのである。なぜなら、人は財産とか社会的地位とか才能、名誉や魅力、業績や評判とかの宝物をたくさん抱え込んでいるからである。その抱え込んでいるばかりに鎧、兜で身を守らなければならないのである。そうなると心は絶対に開かない。利己主義者ばかりが寄り集まり、金持ちは自分を棄てることができない。これが「貧しい者は幸いである」という言葉の意味である。他者との外向きの関係とは「ありのままの惨めな姿をさらけ出し、傷口を露出し、無力さとして、ただ助けを求める者として、弱さその者として、生きること」（岩田２０１５・１３５）でしかないのである。

　そのとき、つまり「自分を棄てた」とき人は人に触れるのである。無防備なものには無防備になるように、本当の意味で愛を贈る関係に入ることができるのである。それが他者との外向きの関係である。ということは、内向きの力を棄てることでしか、外向きの力ははたらかないことになる。この外向きの力こそ、本当の意味での内向きの力がはたらくのかもしれない。愛を贈ることで、逆に愛を受ける逆向きの作用がはたらくのである。反対に、他者に力を振るうものは、ますます、自己に向かう力によって精神の破滅を起こすのである。なぜなら、閉ざされた心は孤独のうちに　破綻するから

である。
「絶対矛盾的自己同一」とは、他者愛が自己の心を豊かにし、自己愛は自己の心を枯渇させるというベクトルがはたらく、矛盾の中にある。それは、ケアの本質がnon-in-differenceであり、自己と他者は異なるからこそ引き合うという二重否定が隠されていたのである。

◆トランスフォール・ピュール

　レヴィナスの言う純粋な移動つまり善意は他者への希求である。それをtoransfort　pur(トランスフォール・ピュール）または、絶対的な方向付け（orientation　　absolue）という。「私はここにいます」という他者への語りである。この私の存在へのアピールは存在していることの主体性を表すことばではなく、他人の足を洗うために存在している奴隷のようなアピールの仕方である。それは他者からの呼びかけでなく、自己の内奥からの呼びかけである。「無限」に近づくこの運動こそトランスフォール・ピュールである。この運動こそ目に見えない。
　しかし、この目に見えない善意の運動は、自己の逃避し覆い隠すことでなく、外に曝す行為である。それこそが唯一己を輝かすのである。つまり、自己を世界に曝すとは、自己の自己実現のための存在のアピールとは真逆の運動である。他者の支配でなく、他者への隷属である。しかしこの隷属は支配からの隷属ではなく、自己の内奥からの命令であることが本質にある。レヴィナスはそれを無限なるものの自己への到来といった。それこそがトランスフォール・ピュールである目に見えない運動である。「無限の観念を自己の中に抱く」（岩田１９９７・１６０）、すなわち、「私の中に超越が

入り込む」（前掲１６０）のである。レヴィナスはこのことを、主体性に対して主観性といった。
「わたしがここにいます」というのは極限的な受動性である。主体性からの運動でなく主観性からの運動なのである。この運動こそが限りなく無限に近づくことであり、自己を忘れる行為である。自己を犠牲に供する行為なのである。あらゆる目に見えるものを理性というすべて目に見えるものに変えて自己の中に取り入れてきた人間は、他者だけは取り入れることはできなかった。理性でモノ化し分析したところで、こぼれ落ちる目に見えないものがあることにすでに気づきていたのである。

　現実に、自己保存本能でははかることのできない次元の行為がある。強い者に対して人間は希求するが、弱い者に対しては、征服するというのが自己保存本能である。その逆の行為とは、もっとも虐げられた弱者に対して手を差し伸べる行為である。それがトランスフォール・ピュールである。他者に鼓舞された自己、霊を吹き込まれた自己であり、主体性は引き裂かれ、受動性として責任の引き受けへと変わるのである。これこそが「無限」の栄光である。つまり、自分の口からパンを取り出し、他人に与える行為なのである。自分の口こそが自己保存本能という内へ向かう運動であるが、それを引き裂きて取り出し、他人へ渡す行為こそは、まったく見返りのない、善意の行為なのである。

　この他者への責任は、いかなる思惟や原則や理性をも超えるという意味で、存在の彼方なのである。この経験的行為こそ自我による基礎づける理性からは生まれない。目見見える分析からは生まれない。目に見えない行為である。レヴィナスは徹底的に自己保存本能を否定する。なぜか。同じユダヤ人の同僚が、死の極限に見せた自己を犠牲にしてまでも、死にゆくであろう病人に対して自分のわず

かな食料を分け与えるという行為が現実にいたるところで見られたからにほかならないであろう。まさに「無限」の栄光が焼き付いて離れられないのであろう。トランスフォール・ピュール、これこそが超越からの、無限からの、神からの、他者からの贈り物なのであろう。この超越、無限、神とは他者のことである。それも単なる他者ではなく、無限からの責任を引きうけた行為としての他者である。その深奥に宿る他性こそ神なのである。

◆存在の彼方とは

レヴィナスにあって他者との関係は、自己同一性と自己同一性との関係を超えるものとは何かを考察することにあった。自己同一性は実存する人間にとってはなくすことができない根本的なものである。もしこの自己の主体性のかなめの自己同一性がなくなれば主体性などというものがなくなり、単なる奴隷になり下がるばかりでなく、自己の精神はそれ以前に自己分裂を起こすことになるであろう。それほど、自己同一性は人間には欠かすことができない原動力であり、生きる力そのものである。

では、この自己同一性がいかにして他者を受け入れることができるのだろうかが問題となる。他者との関係は根本的には深い溝があり、絶対に乗り越えることができない壁があるとレヴィナスは言う。他者との関係は、自己の同一性に対して唯一疑問に付する存在として立ちはだかるのである。自己のこの同一性により自己中心性の暴走を許さないのが他者である。レヴィナスはそれを「他者の顔の裸性」から来ると言っている。顔は唯一衣服をまとっていない覆いのない、世界に対して開かれているという意味で「顔の裸性」といっているのである。

唯一の開けが顔にあり、他者との関係の窓となりえるし、逆に否という顔の窓にもなりうる二面性を持つのである。自己中心性をはらんだ自己同一性に対しては反発の力がはたらく。その逆の力に対しては、顔の窓を開けるのではないだろうかと想像される。その逆の力とは何だろうか。レヴィナスはそれを「希求（desir）」と言った。他者との関係は、希求でしかありえないという。希求は、反発に対して逆向きの力である。つまり自己同一性の力を殺して、他者のために何ができるかを考える逆向きの力である。自己を太らせる運動でなく、自己を無に向かわせる、力をはぎとる、自己がますます細くなっていく運動である。

それは「他者に奉げる一者」でしかないとまで言い切る。そもそも人間が存在するとは、日向を占有することである。つまり他者の簒奪である。奇しくもサルトルがいった他者は邪魔者となる。つまり他者との関りは、存在するとは別の仕方で関わるしかないのである。存在するとは別の仕方とは、支配の関係から共存の関係になることである。しかし共存と言ってもそれほど生易しい問題ではない。なぜなら、生が自己中心性に張り付いているからにほかならない。この自己中心性がなくなればまったくの受動性の存在として、他者のなすまま、すべて受け入れる存在となり、支配されるのが当然の存在になり下がってしますのである。

しかし、レヴィナスは本来の人間の本質は受動性の受動性として存在しているのだとしている。では主体性はどこから来るのか。主体性こそ自己同一性である。自己実現をはかる原動力となる。しかし、もともと人間は主体的に自己がどうして出現したのかを知らない。どこからきてどこへ行くのかも知らない。それは、主体性が本質的に受動性だからである証拠である。なぜなら、自己などというものは最初からないのである。他者との関係から「つくりつくら

れ、包み痛包まれて」自己となったことを忘れているだけである。
　ということは、最初から主体性は他性だったといえなくはないか。他性の塊が主体性だったのである。主体性という化けの皮は、その覆いをはがすと他性が露わになるのである。その露わになる場所こそが、「裸の顔」であるということである。レヴィナスは他者の顔に神の痕跡をみるといった。主体に対して語る（ロゴス）のである。他者が語るのでなく、自己の内奥から「不正」が出現するのである。主体性は他者の裸形にあって他者の簒奪に狼狽するのだ。その狼狽こそが、存在の彼方から聞こえるのである。神の痕跡だけが残るのだ。

◆ヘテロノミーの意味するもの

　そもそも人間が存在するとは、実存が自由として与えられていることから出発している。つまり、生きているということは、自由であるということである。唯一無二とはこのことである。自由から来る自己の不正を明らかにすることでもある。なぜなら、自我の充足した輝かしい自発性や幸福の輝くは、他者との関りで見事に打ち砕かれるからである。他人との接触によって自己の意志は裁きにかけられるのである。それこそが、自己が不正であることの発見である。どうして自己は不正なのか。
　その典型が「ヨブ記」である。恵まれた家庭、財産を築き、信仰厚く温厚な性格であったヨブに突然として不幸が起こる。賊に襲われ家、財産、家族までも失う。ヨブは神を呪った。まじめに働き、恵まれた家族の中で幸せに暮らしていたのになぜに自分だけが不幸になるのか。考えても考えても自分に非があるとは思えなかったのであろう。普通の人間だったら誰でもそう思うだろう。神とのやり

取りの中でとうとう自分に非があることを悟るのである。その悟りこそ、自我の自由による幸福の輝きは、いつのまにか自分中心に回っていたのである。他人を不幸に陥れていたことに気づくのである。

具体的には、自由とは日のあたる場所を取ることだったのである。必ず日の当たる場所を奪えば、日影に住まざるを得ない人がいるということである。自由の根本に横たわる我執こそが罪であるということである。つまり、人が存在するということは、日の当たる場所の簒奪なのである。実存するという経験こそ思惟を超えた規矩（倫理性）である。それは、他人の現前に立った時に生ずるのである。私の力に対する羞恥の念である。「自己を絶えずますます疑問の渕へ投げ込む果てしなき運動から成り立っている」（岩田1997:132）。これが、ヘテロノミーにおける自由の生である。そのことで、自己の責任はますます加重するのである。

レヴィナスは、自己と他者の関係を引き裂かれた生にその根源を見る。本来自己のあるべき他者との関係は、一体であるべきだったのである。それを無理やり引き離したがゆえに、本来は自己も他者も一体だった関係は、他者をも自己の中に取り入れようと企てる我執がはたらいているのである。この要求はますます自己の不正を増大させ、自己満足は許されない。他者との関係は最初から破綻しているのである。その関係の修復には一方通行の他者への善意しかないとレヴィナスは言う。忘恩という善意こそ、他者に向かう一方通行の善行である。

忘恩こそが善意の本質である。「神はまるでどこにも存在しないかのように」善き行いを送りつづけるのである。わかった時点で忘恩ではなくなる。「毎日陽を昇らせ、雨を降らせ、花を咲かせ」る神はすっかり姿を隠しているのである。この運動こそが我執とは真

逆の「逆限定」のはたらきである。自己を太らせる運動でなく、自己をますます細らせていくような作用である。これはただ忍耐の中でのみ可能である。それこそ「私の存在しない時間の中で・・・（中略）・・・自分のための時間を棄てること」なのである。私のあくなき自己の執着から他者の時間へ移行することである。

　レヴィナスはこのような「自我性の絶対化」を破るための他者との関係は、「帰り道のない善意の無限の運動」しかないという。存在するという絶対自己保存としての我執を取りのぞくことはできない。この存在の運動と逆向きの運動がどうしてはたらくのだろうか。この自己に向かう運動に対して常に逆向きの運動がはたらくのではないかと推測される。すべて内に向かおうとする運動は逆向きの力として「羞恥の念」がはたらく。なぜか。無理やり引き裂かれたからである自己と他者は、引き合おうとする運動が常に働いているのである。他者が常に気になり、我執とは真逆の意志が常にはたらいているのはその証拠である。

　本来の自己の在り方とは、自己と他者が一体になった時に永遠の満足、永遠の喜びに到達する道があるといえる。自己に向かう一方通行の運動は、決して自己満足には至らないのである。つまり、自己と他者は相関関係にあってはじめて精神的安定を見せるのであろう。「すべての思惟が相関関係であるという思惟の構造」から起こるともいえる。つまり、人間の存在の在り方とは、根源的な分離として出現していることが、「対面」の出現として人間があるということである。唯一者として存在している意味は、かけがえのなさであり、孤独者でもある。と同時に、常に対面して存在している、対格的存在という意味である。

　対面し対格している唯一者は、顔を通して語り語られる「応答」の関係である。レヴィナスの言う「〝主観性〟とは、〝傷つきやす

さ〟であり、〝責任感〟であり〝善意〟である」（前掲130）と言っている。自己の我執の真逆の運動とは、「外部からのあらゆる加害に身をさらし、他者の身代わりになるまでに自己を巻き添えにさらすこと」（前掲150-151）である。絶対的分離としての自己と他者は「善意」という逆向きのはたらきをすることで、対面する関係性を含有していたのである。絶対的分離としての自己と他者の関係は、その逆の運動が同時にはたらき、対面するという関係で、「応答」と「責任」という運動が成立していたのである。

これは「絶対的分離である自己と他者が生物的連帯性という契機を発条して、分離と死を乗り越えようとする観点」（前掲151）だとも言える。「存在とは違って」「存在の彼方」の関係を示唆しているとも言える。存在するとは、レヴィナスにあっては、自己のためではない、他者のために存在している関係を示したかったに違いない。この逆向きの運動は、我執という思惟のはたらきではない運動、すなわち、「応答」と「責任」という対面的なきわめて実戦的経験的な運動である。つまり、思惟を超えた「目に見えないもの」の関係がそこにある。レヴィナスのいう「神の痕跡」とは神は目に見えないが、応答と責任という目に見えない運動の中に光の充溢があるのかもしれない。自己に向かう運動は絶対に満足に至らないが、この光の充溢こそ、永遠の満足であり、他者と死を超えた関係が隠されているのかもしれない。

他者に向かう一方通行の善意の運動によって訪れる至福の喜びこそが、神からの贈り物かもしれない。この運動こそが「他者に奉げる一者」としての、応答の責任としての重荷であることは間違いない。我執によって重荷を背負いこんだ自己は、応答と責任という逆向きの重荷を背負うことで私たちが存在する真の意味を自覚するのである。「存在するとは別の仕方で」とは存在すること自体の罪の

自覚と存在するからこそ存在するものに道を譲ることが同時に存在しなければばならないという矛盾した必然が生ずるのである。それが「実存の自由からのヘテロノミー」という意味である。

理性を超えたもの、規矩を超えたものが私たちにはある。「存在とは別のしかたで」存在しているのである。「目に見えないもの」の関係とは、ものとものとの関係でない在り方、実存と実存の関係の中で生ずる関係、すなわち、自己と他者の関係の中にある。それは、自己の責任と応答という「語り」「語られる」関係から生じる「光の充溢」「至福の喜び」が見えないものからの贈与があるのではないだろうか。これは、目に見えるものだけを追い求める自己の我執からは決して得られない自己満足を超えた満足なのではないだろうか。

◆主体の受動性

レヴィナスは主体は受動性として存在すると言った。その意味は、主体としての身体は、抵抗するといった。「身体によって主体は不可解なうちに苦しめられ、主体の構造も変調をきたらす」（レヴィナス＝会田２００８・１４０）のだ。つまり、老いや死は不可逆的に主体（自我）に抗い訪れる。生きることの存在する意味は、老いや死に向かう運動体として「存在する」のである。主体としての自我意識は自同性として能動的働きとして「自格」される。しかし、主体性のこの自格は、自己の身体から、他者から、世界から抵抗にあう。なぜなら、もともと、対格として存在しているからである。

レヴィナスはそれを、主体の受動性の受動性としてとらえた。二重の意味での受動性である。なぜ二重の意味なのか。身体を持つこ

とだけでも、主体（自我）に反して老いや死に抵抗することはできないからだ。食べることや寝ることに関しても、能動性であるように見えるだけで、実は、疲労であったり、空腹であったりという身体性から逃れられないのである。主体の自我という能動性は、他性を取り込んだ運動によるものなのだ。レヴィナスの言う「主体の主体性」（前掲１４１）とはこのことである。あくまでも「自己に反して」いるのだ。

それは、他者に対しての関係に通じている。主体は自我を通して享受の内で自己満足する。しかしその「自己に反して」がすぐさま萌芽する。「主体の主体性」であるがゆえに他性がまるで身体性のごとくにはたらくのである。自己の意思に反するという意味で受動性ゆえである。「自己の非合致、休らわない」主体の主体性なのである。自我による自己満足は決して自我の中で休らうことはない。それは、自己のうちに合致しない「非合致」ゆえである。自己の内に入ったとたんに、他性が拒絶するからである。自己満足はあくまでもひと時の享受にすぎないのだ。

「他人のために身代わりになる一者」とは、受動性の受動性として、自己の意思に反して受苦として立ち現れる。責任として拒否できない受苦として「自己に反して」立ち現れるとレヴィナスは言う。それは「対自の口からパンを引き剥がし、みずから断食することで飢えた他人を養う」（前掲143）ことである。唯一性としての自己とは自己との非合致、自己に休らうことのない「平穏の不在」なのだ。「自己の身代わりをたてることの不可能性」なのだ。自分自身に反した善良さとして萌芽する。善とは主体からは生まれないが主体から生まれるという矛盾の中で生起する運動である。

「他人のために身代わりになる一者」と言う善的行為は、決して自同性からは生まれない。主体という自我に反して、自己の痛みか

ら生まれると言っていい。ゆえに、他者の痛みから発した自己の感受は苦痛の内に、自己に抗って生気する受苦なのである。しかし、この苦痛としての切迫が、幸福感という享受として萌芽する。至福の幸福感である。永遠の享受たらしめる自我の満足は、他者の切迫した苦痛から萌芽する。偶然に生起する切迫的苦痛の内に訪れる弱者からのうめきであったのだ。

そもそも人が存在するとは、主体の主体性の運動である。その主体性は、受動性としての主体性からきているのである。生きるとはあくまでも生かされて生きる主体である主体性として存在している。生から死に向かう運動体として存在することが人間の真の姿である。それも、主体性が他性に裏打ちされているがゆえに、自己は他者ととみに対格して存在しているのだ。だからこそ、他者と関わりなしには生きられないし、主体性の意に反して切迫した他者の存在にたじろぎ、苦痛の中で身代わりになる行為が現われるのかもしれない。それが、受動性の受動性たるゆえんである。

◆自己同一性の崩壊とは

レヴィナスの自己同一性の崩壊とは何か。自己同一性とは、世界のあらゆるものを自己の手中に収め、世界の中心たろうとする運動である。「主体の主観性」とはそもそもそういうことである。自己は、ますます太り肥満と化す運動である。しかし、レヴィナスは、そうした、主観性は一方で崩壊しているという。それは、全体から「分離された個体」「切り離された者」(ab-solu)だからであるとする。全体化されないもの。モノとして扱えないもの、認識されないものだからである。

「他者から切り離されたもの」という言い方をする。だからこ

そ、人間はいつも他者を希求してやまないのである。他者との結びつきを希求するのだ。なぜなら、かけがえのない唯一者であり、孤独な実存者だからである。そういう意味で、すべての世界を手中に収める絶対化の力（自己同一性）なのではなく、「対面」して安定するように出来ているからである。これを、レヴィナス流にいえば倫理的に他者は対面しているのである。だからこそ、人間の全体主義は成立しないのである。ナチスの家族を殺された経験を持つゆえにレヴィナスは、この全体化にこだわる。

「主観性」とは受動性なのである。「レヴィナスの主観性とは、外部のものを自己の中に取り込んで自己が肥え太る働きではなくて、ちょうどその逆に、自己の外に注ぎ出す働き、自己がますますやせ細り、空虚になり、遂には自己の死のかなたに移りゆくような働き」（前掲１５１）である。これこそが「善意」の本質であるとする。この善意は、分離や死を乗り越えるような観点を持つという主張にレヴィナスの真骨頂がある。この他者に奉げる一方通行の善意は何の見返りもなく、ただ繰り返し捧げるしかない運動である。

「絶対的分離である自己と他者が生物的連帯性という契機を発条にして分離と死を乗り越えようとする観点」（前掲151）である。この「生物的連帯性」とは、基体である身体のことである。主体と身体は一体であるが身体が基体であるゆえに、主体は常にこの身体に遅れているということである。たとえば、身体の痛みはあらゆる主体の主観性より先立つ。痛みは、悩みに先立つのである。この痛みこそが他者との連帯を促すのだ。ただし、この痛みは単なる身体の痛みではなく、孤独から来る痛みである。孤独な実存者としての根源的な痛みだからである。自己の深奥にこのような痛みがあり、生物的な連帯を再起するのである。

引き裂かれた個体は、空虚さに出会うことで世界に出会うことに

なる。「わたしはあなたの御用にたつためにここにいます」と語ることこそが連帯の契機をなすのだ。絶対的高みに存在する他者に対して取る自己の態度は低く身に立つ以外にない。まさに隷属的態度である。なぜなら絶対的過去において切り離された存在である個体は、常に完全を求めてやまないのである。常に不完全であり、完全になることはないからである。しかしこの完全になろうとする運動こそが、「無限への栄光が己を輝かす」契機となるのだ。「私の口を通してわたし自身に命ずる」内面的行為そのものであるとレヴィナスは言う。

「自己保存本能」とは異なる次元の行為である。いうなれば自己同一性の崩壊行為そのものである。「私はここにいます」という存在証明とは、自己同一性による我執とは真逆の運動である。生きることは自己実現することであるという事実がある。しかしこの自己実現は、自己保存本能を有するゆえに、他者とは相いれない。その根本が孤独な実存者にある。しかし、食うために生きている身体の声とは違った、やがて身体は劣化し無と化すことの声が聞こえるのである。それが「私の口を通してわたし自身に命ずる」のである。

レヴィナスは主体の極限的な受動性こそ自己保存本能を打ち破る契機となすと言っている。主体の主体性でなく、主体の受動性である。それは偶然に出会う他者へと指定された責任、「隣人のための責任」であるとする。それが他者の身代わりになること、自発性に別れを告げることなのである。このことがすべて都合の悪いことは秘密の暗がりに置こうとする自己の本能性から解放され、明るみに出て光を放つ、自身を輝かす契機なのである。他者からの受け入れ、世界からの受け入れの契機となる。孤独からの解放の契機となるのである。

一時の満足感から永遠の幸福に至る道とは、このような、他者へ

と捧げる一者となることである、自己は一者でしかないという自覚であるのかもしれない。この自覚こそが自己同一性の崩壊なのである。自己同一性の行き着く先、自己実現の行き着く先は、地位や名誉や財産を築くことによる錯覚の幸福であることに気づく。なぜだろうと。実際に地位や名誉や財産がなくても、生き生きと他者のために自己を捧げることで幸福を味わっている人がいるのである。なぜだろうか。

レヴィナスは「引き裂かれた個体」だからという。不完全な個体だからだという。常に他者との連帯を願うように強いられているからである。何度も何度も受け入れられない他者に向かって善の息吹を捧げ続ける行為こそが、幸福の契機となるからである。この忘恩の行為こそが至福の契機となりうるのかもしれないのだ。「神の栄光の輝きとは、主体の極限的な受動性の裏面にほかならない」(前掲163)のだ。「私の言葉は、命令を聞く前に私が発した服従の言葉」(前掲１６４)である。

自己の奥底の深い井戸の暗闇を覗く込んだ時にみる、「なんて自分は卑しく醜いのだ」という自覚であろう。都合の悪いことはすべて闇の中に隠そうとする自分を見るのである。絶対無の叫びなのかもしれない。「動の中にある他」「先に語ること」にほかならない。

◆対格としての私とは

わたしは根源的に「主格」ではなく「対格」であるとはどういう意味なのか。私の存在とはまさに、主体性として、世界と関わり合う。それが生きているということだと考える。ハイデガーは存在の根拠を探し求めた人である。そのハイデガーに言わせると、自分は

確かに両親によって生まれ、存在根拠のように思われている。しかし、それでは、根本的に私個人が存在することの存在証明となりうるのかを考えてほしい。ハイデガーは世界に投げ出されて存在したといった。これが「被投性」である。いわば、存在根拠の無さを意味している。それをレヴィナスは「対格」といったのである。

「対格」とは、自分などというものはそもそもないというところからきている。まるで自分は世界の主人公のように思って生きているが、ひとたび他者に出会うと世界は一変する。自分の身体一つとして自分自身をコントロールできないことに気がつく。「私はすでに他者との直面に投げ込まれて存在している」（岩田２００８・１５７）のである。わたし自身がつくりだしたものではないのである。わたし自身が了解して世界に生まれたわけでもない。「無から創られた」といういみで「根源的な受動性」なのである。

人間一人になると途端に不安が襲ってくる。冒険家は一人で未踏登の大自然に分け入って孤独とたたかう。しかし、必ず心の支えになる他者が、いつもそばで見守っているという安心感があるからこそできることでもある。「対格」として存在している所以である。根源からの贈与であるからこそ常に「対格」である。つまり生かされて在るというありかたである。対格であるとは受動的であることでもある。主体の主体性はどうして生まれるのか。その根拠となるのが、自己中心性としての自己同一性のなせる業である。

自己同一性こそ、あらゆるものを自己の中に取り入れ、自己実現をはかる原動力である。これが自己は「主格」であろうとするマジックである。トリックである。しかし他者との関りは、他者を同化できない、私を拒否する、否定する存在であることに気づく。他者とは「他者の超越」「他者の痕跡」であるとレヴィナスは言う。「責任と身代わり」（レヴィナス＝合田２００８・１１６）という

他者との根源的2側面を提案する。責任とはわれわれは常に他者との対格的関係であるからこそ責任が付きまとうのである。カントの言う「提言命令」であり、呼びかけに対する応答なのである。その他者の苦しみと挫折と死の切迫に巻き込まれ、その叫びに応答することが「責任を引き受ける」ことなのである。

「対面」の出現が人間の根源的状況であるとレヴィナスはいう。それが人間が存在することの根源的状況である。それは「分離された個体」である。全体からの分離、世界からの分離、または、絶対者からの分離であろう。ゆえに、不完全なものであると同時に、全体化されないものでもある。同一性とは、このように、全体化しようとする力と同時に、全体化を拒むものという矛盾した運動性を持つものである。それが、レヴィナスの言う「主観性」と言えるのかもしれない。「他者から切り離された単独者、かけがえのない唯一者、孤独な実存」（岩田１９９７・１５０）という絶対者的本質を持つのが人間なのである。それが、対格として存在していることの本質である。

だからこそ、人間はいつも他者を気にし、他者を時に超越（神）としての痕跡を垣間見るのかもしれない。分離された者だからこそ、より高き他者を希求するのである。他者とはいつも憧れの存在として敬うしかない。対格して存在しているからである。

◆可傷性は意味であり方位であるとは

レヴィナスのいう「可傷性は意味であり方位である」（レヴィナス＝会田２００８・１６０）とは何だろうか。可傷性とは主体性の苦痛である。なぜ主体性は苦痛なのか。主体性が享受と結びついているからである。享受とは例えば、のどが渇き水を飲むことによる

自己満足である。つまり身体は主体に先立ち我執にまみれている。かくして主体は我性そのものとなる。しかし、その我性自体がもともと他性であるだけに、満足は「不完全な幸福として、たちどころに核分裂してしまう」（前掲１５９）のである。それはまさに主体性の動揺であり、苦痛である。

　自己の中の他性により主体は傷つけられる。他者によって自己は傷つくのである。なぜなら、主体とはどこまでいても自己中心性であり、他者への力による支配だからだ。他者を傷つけようとする力がはたらく。だから、他者はそうさせない逆向きの力がはたらく。これこそが、「可傷性の受動性」である。主体性の享受はどこまでいっても満足することがない。常に逆向きの力がはたらくからである。「自同者に息を吹き込む他人へと逆転され」（前掲１６０）るのだ。

　つまり、主体の可傷性は、自己のためにという我執から他者のためにという逆向きの力がはたらくのである。西田の言う「つくりつくられ、包み包まれる」関係であり、「絶対矛盾的自己同一」なのかもしれない。常に矛盾だからこそ「逆対応」がはたらくともいえる。主体性の享受という無意味が、可傷性という苦痛により意味を持つことになる。なぜ意味を持つのだろうか。「他人のために身代わりになる自同者」に到るのだ。それはあくまでも「可傷性の受動性」ゆえに自我とか主体性の範疇ではなく、自我の崩壊として現れる「身体が勝手に反応する行動」だといえる。

　かくして存在することの意味が無意味に内包されていることに気が付く。存在することが単なる享受であるなら、我執にまみれた自己満足は究極は「他者を支配する一者」にすぎない。最後は自己に支配され自己自身が分裂することになる。なぜなら、主体性は他性が内包され「逆対応」の可傷性がはたらくのである。それは現実的

にどういう状態のか。まずは自己は自己中心性の力を借りて（主体性）、自己実現を目指すのである。なぜなら、「食うため」である身体性の享受である。そのために地位や名誉や財産がつきまとう。まさに、ハイデガーのいう「存在を歌うために生きる」ことが究極の意味となる。

　はたしてそうだろうか。自己実現を目指し地位や名誉や財産を持ち、食うことに困らなかったとして、それでも人は満足しないのではないだろうか。人はますます保守的になり、高い壁を築いて他者を遠ざけ、ますます孤立するのではないのだろうか。この孤独の心性こそが存在することの無意味の可傷性なのではないだろうか。はたして、自分の存在することの意味を問うことになる。人は生きることの意味を問うのだ。自己の奥底からの声なのである。それが、他性であり、記憶を絶した過去からの声なのであろう。

　この自己の本来的な在り方を西田は「平常低」としてあらわす。それは、「一歩一歩血を滴らせながら、自分をがんじがらめに縛っている執着を取り除いて到りえた」（藤田２０１５・１５５）心境なのかもしれない。「行屎送尿ぎょうしそうにょう、　着衣喫飯ちゃくいきっぱん　疲れ果てればすなわち臥す」（前掲１５７）ことに達する。これが、絶対（神）に対する「逆対応」の根本的な転換なのだろう。享受という自己への贈与が可傷性によって逆転し他者への贈与になる道筋なのであろう。「他人のためにと化した身体の自同性」（レヴィナス前掲１６９）であり、他者への贈与の可能性なのである。それがレヴィナスの言う「可傷性は意味であり方位である」ことの本質である。

◆他者への善意はあるのだろうか

この世にもし善意というものがなかったらどうなるのだろうか。すでに善意というものはないのかもしれないし、失っているのかもしれない。たとえば人は半殺しにあった人間が傍に転がっていたら、見て見ぬふりをするのが普通の人間である。自分を守るためである。文明社会が進めば進むほど、世の中が豊かになればなるほど人間は守りに入る。保守的になる。地位や名誉や財産を守るためである。厄介な面倒なことには関わりたくないのが人間の心情である。しかし、通り過ぎた人間に人間は何か心にわだかまりが残る。何か重いものを感じる。

なぜだろうか。人間だからであるというのがその結論。まったくの見ず知らずの人間に対して困った時に他者を助けたいという心情が起こる。これはだれにでも起こりえる。しかし、実際行動に至る人はいない。ただ、重いショックだけは心の中に沈むのだ。これをレヴィナスは、トランスフォール・ピュール(transfort pur) といった。「純粋な移動あるいは絶対的な方向付け、オリアンタシオン・アプソリュ(orientation absolue)」（岩田２００８・１２５）である。他者に向かって運ばれるのである。その運動は不遜な動機などはない。

私たちの心にも体にも、最初から他者が入り込んでいる。もともと自分などというものはない。他者によって自己はつくられたからにほかならない。その証拠に、主体性は常に他者に向かっているのである。ハイデガーが言う「存在を歌うことが人間が生きていることの究極の意味」といった。ほんとうだろうか。存在を歌うとは自己の実現である。それが人間の生きる究極の姿だという。たしかに、自己の能力を最大限に生かして地位や名誉や財産を築くことが

目的のように思われる。しかし、そのどれも達成したかからといってほんとうのよろこびはあるのだろうか。他者がいなければ、ただの自己満足にすぎない。ちっともうれしくないのではないだろうか。

　人間の我欲は際限がない。自己実現はたしかに人間の生きる目的ではある。しかし、自己同一性という自己中心性の力によって自己実現は達成される、という意味で自己へ帰る運動に過ぎないのである。自己から自己へ向かう運動は我欲でしかない。だから、そこには、真の喜びない。達成された時点で喜びは束の間で終わる。すぐに次の要望へと駆り立てられ、際限のない自己満足に陥るのである。ハイデガーの言う人間が存在するという最終目的は決して歌うことではないことがわかる。至福の喜び、存在の喜びは他者のためになった時に訪れるのである。レヴィナスは他者の中に神を見た人である。他者は私たちの把握を超えているという意味で「無限」であるといった。無限はフランス語で「アンフィニ」といい、有限でない（無限）という意味と、有限の中にあるという二つの意味があるとレヴィナスいう。

　それは、神は他者の中にあるという意味である。神はいつもいるのかいないのかわからない。しかし、他者の一瞬の行為に神を見ることがある。トランスフォール・ピュールである。他者の行為の一瞬に神を見るのである。それは、「他者に奉げる一者」でしかない、見返りのない一方的な他者への運動だからである。「レヴィナスは〝他者は不在だ〟と言う・・・（中略）・・・他者はこの痕跡を通して指し示される不在なの」（前掲１３０）だという。痕跡だけを残して立ち去る、神はいつも不在であり、他者を通して痕跡だけを残して立ち去るのである。

　人間の善意という行為は、あまりにもかすみ、陰に隠れてみえな

いものである。もしも誰も見ていない暗やみの中で、半死半生の人に出会って反射的にたすけるしかなかったならどうだろうか。それが善意であり、一方通行の運動なのである。「他者に奉げる一者」といて我々は存在しているのである。それが私たちの生きる意味だ。

◆人を生気づける可傷性とは何か

　レヴィナスは人間には愛があるのかを常に見つめていたに違いない。人は人をことごとく殺し、支配できるものだけを置こうとする。しかし、レヴィナスは人は支配できないものであるという根源的な問いを見つめたのである。人は絶対に支配できない。そこから出発すると、他者の究極の姿は「憧れdesir）」でしかないのである。レヴィナスはその根源を探し求めたに違いない。なぜなら、ユダヤ人だった自身は、かの大戦で、肉親はすべて殺されるという体験に基づいている。何と人間は残虐なのだろう。おそらくレヴィナスは「父や母を返せ、それにつながるユダヤ人を返せ」と言いたかったのではなかろうか。

　そこでレヴィナスは、人を支配し、殺すまでに至る人は、どうして他者との愛が可能なのだろうか。そう考えたのである。その人の心の根源に愛を、または神を見しだしたかったのかもしれない。なぜなら、人が生きる意味はどこにあるのだろうか。人を殺すためだろうか。私利私欲を肥やして、それでも人は生きる意味があるのか。その根源を見しだしたかったのだろうと思われる。人間の人間たる魅力は何かを見つめた人であった。レヴィナスの魅力はそこにある。レヴィナスのたどり着いた究極は「友のために死ぬことにおいて神の栄光が現われる」ことを言いたかったのである。それは

「他者に奉げる一者」でしかないと結論づけるのである。
　ユダヤ人として生まれ、ナチスに家族は殺された。憎んでも憎み切れない他者にあって、それでも、人は他者から離れることはできない。その異邦人を愛することが世界平和への道に違いない。しかし、人はそれがなかなかできない。「存在を歌うことが人間が生きることの究極の意味だ」とハイデガーがくしくも言ったことにその根源があるからだ。人が生きるということは、または、人が存在するということは、「享受」することである。人が存在するとは食うため世界のあらゆるものを享受するためである。極めて内向きの運動である。エゴイスティックな運動である。人間の根源的な姿でもある。
　しかし一方レヴィナスは次のように言っているのである。

即かつ対自的に措定された自我がもはや、自分を傷つける他人を、志向的運動をつうじて引き受けたりしないために。無意味による意味の凌駕たる苦痛が、この可傷性のうちで、自同者に息を吹き込む他人へと逆転され、意味、他人のために身代わりになる自同者のほうが無意味を凌駕しうるために。何とこのような地点にまで、可傷性の受動性ないし忍耐は至らなければならないのだ！そこでは、感受性は意味であり方位である。〝他によって〟であると共に〝他のために〟（他者の代わりに）は、〝美しい言葉〟（文学）をつうじて高揚した感情のうちに存しているのではない。そうでなく、〝他者のために〟（他者の代わりに）は、たとえばパンを味わう口からパンを引き剥がし、それを他人に与える際に生起する。享受のうちで結晶して〈自我〉の核がこのとき崩壊するのだ

レヴィナス＝会田２００８・１６０

他者は自然を享受するように享受することはできない。つまり他者を支配できない。単なる志向的にとらえることはできない。他者との関りに「動機」を持っていないということである。純粋な移動、他者に向かって運ばれるという、外在的原因なしに運ばれる。それが、他者への「希求」（憧れ）でしかない。他者はそういう意味では所与ではなく、根源的意味である。他者に向かう運動が自我の核が崩壊し「可傷性」をともなうことで、本来の自己が蘇るのかもしれない。その時人は生気するのだ。

◆存在と存在者との差異とは何か

存在とはそもそも何か。動詞的な運動体である。正確に言えば存在するということである。人間の存在はきわめて運動体的である。ものとなって存在することで存在者という名詞になるわけである。つまり、その差異は、運動体か個体かの違いである。人間はまるで存在者のように見える。しかし人間は存在者ではない。ハイデガーは人間だけに「現存在」という名前を与えた。それは、現在進行形として、いま現在でしか存在しない運動体だからである。存在するとは、「存在することを指示している」（レヴィナス＝合田２００８・66）ことである。

語られることで固定するのである。つまり、ロゴスによって切り取られることで、運動（動詞）は固定（名詞）するのである。つまり、存在することと存在者との差異は、志向性から感受することからくる、ロゴス（言説）すること（認識）である。そこには、認識する運動は自動性の中の他性との差異でもある。「差異の中の同一性」ということである。つまり、自己と他者との差異に行き当たる。「他なるものが何らかの形で意識に現われるに先だって、”自

同者”は〝他者〟と関わっている」（前掲71）のである。主体性は「同の中の他として構造化」される。次のレヴィナスの言葉は重要である。

意識は、主題、表象された現在―、私の面前に定位された主題、現象としての存在とつねに相関的である。しかるに、〝同〟のなかの〝他〟として主体性が構造化される様相は意識の様相とは異なる。意識との面前に〝定位された〟主題との関係がいかに間接的かつ薄弱で、不安定なものであろうとも、意識はあくまで存在についての意識である。意識とその面前に〝定位された〟主題との関係が〝血肉をそなえた〟現前の知覚であれ、ある像の形象化であれ、象徴化であれ、仄めかされただけの一過的なものや不安定なものの透察ないし隠蔽であれ、客観化を切望しつつも主観的なものにとどまる謎解きであれ、意識はあくまで主題との相関関係であり、存在についての意識なのだ。

レヴィナス＝合田:71

レヴィナスは、存在することの〝在る〟ことにこだわる。意識はあくまでもそこにあるもの、そこにあることにしばられる。意識以前に血肉ある身体性を基幹していることからぬけだすことはできないのだ。また、その意識は、自動性という運動性を持っている以上、無意識の他性が構造化されているのである。意識はあくまでも他性であることである。自己は他者との向き合う以前に、すでに他者と向き合っていたのである。同の中の他である。差異化されているとは構造化されていることでもある。

かくして、主体性は、構造化によって他性に対する自同性による

忠誠をともなう。つまり、主体性は、他者への忠誠という意識が自同化されているのである。そもそも主体などというものはないのかもしれない。主体性は他性そのものであり、すでに他者との関係で無意識の忠誠が生ずるのは「動揺」という形でやって来るのである。その動揺こそが自己と他者の差異であり、存在することと存在者との差異である。またそのことは、存在することから存在するものへという志向性なのである。つまり、ロゴスとして切り取られた存在者そのものなのである。存在または存在することという運動性（動詞）は常に、矛盾した自己と他者を自同運動によって、無意識のうちに内包することだったといえる。

◆存在とはあるいは存在の彼方とは

　レヴィナスは、存在とは他者との関りでしかないとまで言う。それは、自己とは内在的には我執であり、内在的自己は、他者との挫折で自己となるからである。主体の主体性とは、身体を伴うという意味であり、身体をもって考える存在であるという意味である。それは、身体が世界に開かれて存在しているという意味では、受動的存在である。なぜなら、腹が減って食う、のどが渇いて水を飲むという行為は、そこに主体性などというものが存在しないのである。本質的我執ゆえに何も考えることなく世界にかかわっているという意味である。

　人間が存在するとはつまり、世界との関りである。世界に包まれているだけでは存在とは言えず、世界を包むことではじめて存在しているという考えである。包むとは、「他者と共に」あるあり方である。「他者は他なるものであり、他者の他性は赤貧と弱さの全重量でもって私にかぶさってくる」（レヴィナス＝合田2008:57）と

いう見方である。つまり、他者とは高さと共に低さを併せもつ存在である。だからこそ、人は常に引かれるのだ。それは、敵対であり、憧れであるという矛盾の共存である。

身体性を持つ自己は世界に対して受動的であり、自己の主体性は、常に受動性に対して遅れているのである、つまり、受動性の中の主体性でしかない。自我という我執は極めて受動性であるがゆえに、いつでも他性を持った主体性である。ということは、もともと他性による主体性は、他者が「全重量をもってかぶさってくる」という応答の関係性を内包している。「どんな敗北よりも根底的な敗北よりも根底的な自我の解体ないし破損」(前掲57)なのである。それは、自我とは他性を内包しているゆえの「ひび割れ」であるあり方だからである。最初から破損しているのだ。

なぜ破損しているかは、主体性が矛盾を抱えているからである。他性という主体性はすでに矛盾をはらんでいる。応答という主体性は、責任という受動性をはらんでいるともいえる。レヴィナスは自己が光輝くには、主体性の破損の爆発の瞬間であると言っているように思われる。それは、傷つき倒れたものを助け出す行為の瞬間に他者に隠れたかれ性(il y a)が現われるのではないだろうか。「他者に代わって苦しむ」ことは損得勘定のない、ただ光る(il y a)という意味で「存在とは他なるもの」(前掲57)といっているのだ。あるいは「存在の彼方」と言っているのではないだろうか。

◆存在するものが他であること

自己は本質的に絶対的他性を有している。なぜなら、死は他者からの到来であるからだ。どう主体性が抗しても避けることができない。そういう意味では重荷であり、運命を背負っているという意味

で宿命的である。絶対的他者が存在する。無いのに何ものかがそこにあるというiイリア（il y a)という形而上学的世界がある。そういう意味では与えられているという意味で受動的である。能動的主体性は同一性という錯覚でしかない。自分の中では気が付かない。

　自己とは主体性の主体であるという。それは、身体を有している主体性は、それを引きうけている。身体に瑕疵づかれていることになる。普段は気が付かない主体性は、身体の変調、痛みや疲れなどの情態性という科学的でない、どちらかというと形而上学的なものを引きずっている。つまり主体性は常に身体を引きうけ、生まれてきたことから遅れてやってくる。この差異は自己と他者との差異でもある。

　なぜなら、自己とは身体を所有し、身体は世界に開かれ、自己同一の運動によって他性を取り入れながら自己を形成するからに他ならない。常に主体の主体性は遅れてやってくる。身体を伴った主体は、自己同一性という運動（主体性）で主体たらしめる。しかし、その主体は主体性に気が付かない。その差異（他性）に気が付かない。なぜなら、自己とは始めからないのである。自己は初めから、他性を内包しているゆえに、他者との関りで安定するように出来ているのである。それは、細胞の「動的平衡」に似ている。

　「動的平衡」とは、細胞は死滅と生成を同時に行い平衡を保っているというもの。主体性とは世界（他性）を取り入れながら自己を形成する運動である。他性の中には身体も含まれる。身体は、まさに、細胞の塊である。その中では生成と死滅が同時進行で行われている。その運動の中で劣化を繰り返しやがて死滅が生成に勝り、死滅が全身を覆いつくし死へといざなうのである。同時に主体性はその主体性とは裏腹に無化する。老化は主体性に反して、仕方がない、あきらめとして主体性に届く。それは「他者との対面」である

とレヴィナスは言う。「死という全面的な他性はただ他者を経由して私の現在に手繰りよせられる」（熊野2014:84）のである。私の死の対面は、自己でなく他者だからである。

　こう考えると、死とは初めから自発性に内包された他性であり、それは、他性から他性に回帰する運動でもある。つまり、自発性は無（死滅）と有（生成）を内包し、自己同一性を保っているのである。西田の言う「絶対矛盾的自己同一」ということになる。つまり、有と無の動的平衡の中で自と他は秩序を保っていることになる。他なるものと自己とを同化し、自己を他者化していくのである。「他なるもののうちで生きながら私である」（前掲102）という姿である。「大地の恵みを享受するとは、食物を咀嚼して、他なるものと私との隔てを解消していくことである」（前掲102）。つまり、自己と他者の差異を解消すること、つまり同化することなのである。自己と他の矛盾的差異は自己同一という運動で私が現われるのである。

　つまり私とは、自己と他者の矛盾の中で同一して「動的平衡」のただ中にいることになる。この動的平衡の均衡が崩れるということは、私という人間の崩壊である。つまり死であり、他性への移行ということである。レヴィナスは「享受の幸福」は「憂い」がつきまとうという。それは「光」に対する「昏がり」であり、存在とはすでに始源の内包、または、根源の内包である。生とはすでに死が内包され、根源に向かう運動であるといえる。他者から他者へ向かう運動であると言える。私ごときものが初めからかけらもないことの証明でもある。

◆享受としての身体とは何か

「身体であるとは他方また、〝他なるもののうちで生きながら私である〟というできごとである」（熊野2014:102）とは具体的に何か。それは、「身体である私は、食物を口にし、大気を呼吸する。大地の恵みを享受するとは、食物を咀嚼して、他なるものと私との隔たりを解消していくことである」（前掲102）それは、私は他なるものを同化し私を他化していく事である。「超越論的主観性」は死ぬことも生まれることもない。生まれやがて死ぬのは身体を所有するゆえである。身体性である主体は、苦痛を背負い、重荷を背負っている。身体であるということ自体が受動的な出来事である。

「ひとは苦痛において存在へと追い詰められる」（前掲104）。それは、主体性は身体性を背負って存在しているゆえに、身体から発する苦痛は存在からの警鐘なのだ。生きているとは、存在そのものを背負って立つ姿である。つまり、存在するものは始原的なものに没していき運命を背負っていることなのである。少なくとも私という存在は始原的なもの（イリヤil ｙ ａ）からの無償の贈与である。なぜなら、私という存在は、根拠がないからである。とりあえずは、両親からの贈りものであるが、その行き着く先にある存在根拠はわからない。ただわかっているのは何かわからないが、わからないものからの贈りものとしか考えられないのである。そういう意味で私たちの存在は、イリヤからの贈与であるととりあえず答えるしかないのである。

「腹が空くから食べる」ことは、享受することであり、世界を享受するのである。かくして、人間と世界はぴったり一致する。身体とは享受である。欲望である。それは、身体持つゆえである。身体はそれ自体一つの欠如であるとは、必要に応じて必要を迫られる。飢えだけでなく、裸形の身体は暑さや寒さに曝され、何らの欠如が

あるゆえにそれに対処しなければならないという欲求が常にうまれるのだ。いわば、欲求こそが自己同一性の最初の運動であるといえる。しかし、世界にあって決して充足できないものがある。それは、自分と同じ身体を所有し、同一性という運動によってつくられた主体性をもった人間である。それが、他性であり、他者であり、世界である。

　他性とは「私の同一性を破綻」させるもの、主体の支配を終了させるものである。それは、絶対的他性であり、主体の消滅という意味で他性とは死そのものでもある。死は現在からの地続きでなく、未来そのものである。他者もまた絶対的な「未－来」といえる。だから死は「他者のうちに現前している」（前掲84）とレヴィナスは言う。死と他者とは「絶対的に他なるもの」という一点で結びあう。未来もまた絶対的他性によって刻印される。身体は主体性以前の存在であり、生まれて息をし、飲食し消化し排泄し、やがて死んでゆく。まったくの他性そのものであり、受動的である以上、逃れられない。他者と死は受動性の受動性であり、二重の受動性を主体性は背負っているといえる。苦からの逃亡はできないのである。

　この受動性は世界から見れば無償の贈与であり、主体性からみれば享受である。世界とは未来であり、始原的なものに左右される存在でもある。世界もまた始原的なものの中に没していくのである。存在することは、光があり、他方「昏がり」があるという二重性を有している。西田が言った、絶対矛盾的自己同一性として存在者は存在しているのである。世界も他者も主体性としてのわたしも自身も有と無とを併せもつ矛盾の中で生きているのである。生きるとはこのように贈与であり享受である一方で重荷であり苦痛である。

　また、欲求であり、満足である。「水を飲みこむことで世界を受けとめる」。「水の冷たさ、可術の柔らかさ」を受けとめる。その

とき私は自己を忘れ世界と一つになる。欲求が私のもとで自己同一化するのだ。しかし、この同一化できないもの、それからはみ出すものが世界にはある。私と同じような主体性を持ち、身体という有限性を所有し、矛盾した自己同一性を生き、どうしても自己の中に取り入れることができないものがある。他者である。他者とはそういう意味で超越であり無限であり神でもある。自己同一への還元が絶対できないものが他者の存在である。

自己とは「エゴイスティックな自発性」であり、世界を同化し続ける。存在者を包括し続ける。世界にある他者も例外ではない。しかし一方で、その「自発性を問いただすもの」こそが他者でもある。外部からの異邦性である。ある意味「他者の現前そのものが倫理」なのである。外部からの到来する他者のみが、私の単独性、唯一性を証明する。つまり、私が私であることなのである。他者とはそのように現前化し、「呼応」し続けるしかないのである。

◆差異の中の同一性とは

ケアの本質を最初に表したメイヤロフは「差異の中の同一性（Identeity in difference）」について次のように言っている。「ケアにおいては、私たちは相手の人を、自分とは別個の対象と感じとらえているのであるが、同時に、私たちと一体をなしているともとらえている」（メヤロフ2011:186）。さらに注釈に「見る（see）」という表現よりも、「経験する-深く身に感じとる（experience)」という表現であるといっている。「他者と自分たちの間の意識は、両者の間の一体感を含んでいる」（前掲187）とし、「そこには、私たちを一緒に包んでくれている何ものかに、私たち双方が共にかかわっているという感覚」（前掲187）があるの

だとしている。この点に関しては、精神と身体の差異に関係があるのかもしれない。

　レヴィナスは「はじまりは自己自身への回帰においてみずからを所有する」（『存在するものから存在するものへ』）という。主体の成立は、常に私の（主体）の成立に遅れているのである。主体が成立するのは一般的に４〜５歳ぐらいである。生まれた瞬間は自分ではわからない。それは人に聞いて理解するという「折りかえり」理解するしかない。反省（折かえり）によってのみ主体は到達するという意味で、そこには、精神と身体は差異によって成り立っていると言える。

　「主体は存在を所有することで、存在によって所有されることになる」（熊野2014:79）。身体と精神（主体）は差異化し、常に遅れており、存在（身体）を所有しているという意識がはたらく。主体は現在である限りは存在は所有しなければならないという逆対応が生まれる。つまり、主体とは常に今現在の意識である限りは、先に存在に征服されているのである。常に主体は存在（身体）に遅れており、主体（精神）は身体という存在に支配される性格を持つ。

　そのことが、ある意味では、メイヤロフのいう「差異の中の同一性」の原因ではないかと思われる。他者は確かに別個の対象である。しかし、主体は存在（身体）に遅れてやってくるゆえに、すでに共通の身体性を持っていることに気づくことになる。意識よりも先に存在していることに「深く身に感じる」という主体性が生まれるのではないだろうか。身体は他性をはらんであることでもある。だからこそ一体であるといえる。

　さらにレヴィナスは「存在そのものが他であることであるような、何ものか」と関係しているという。なぜなら、死が避けがたく到来するのである。意識に先立つ身体は、主体に関係なく身体のほ

ころびを後から感じることになる。身体のほころびはやがて劣化し死へとモノ化していくことになる。それは、一つの不安であり、「深く身に感じる」絶対的他性を有していることなのである。そこには「私たちを一緒に包んでくれている何ものか」にかかわっていることを示唆しているともいえる。
　西田の言う「絶対矛盾的自己同一」ともつながるものがここにある。無と有という絶対矛盾を有する主体と存在は、死と生という差異を矛盾の中で同一されているのである。メイヤロフのいう「差異の中の同一性」であると言える。そこに、自己と他者の差異と当時に一体性が「深く身に感じる」のではないかと思われる。「私たち双方が共にかかわる」身体性の保有はある意味では「重荷」ということになる。そこにケアという意味が発生し、人が人にかかわる原点があるような気がする。

◆他者をいかにして迎え入れるのか

　レヴィナス自身も自己同一性を持つ自己の主体性は他者をも同化する力を持つ。ゆえに、他者とは支配と被支配の関係でしかない。この関係は、常に対立関係を内包している。つまり他者とは、自己の同一性に対して否定する存在である。自己の同一性を打ち砕く存在であることを基本としている。自己が他者を迎え入れることはあり得ないということである。そこで、レヴィナスは主体性について考え直すしかなかった。主体性としての同一性は世界のすべてを自己の中に取り入れることであった。つまり主体性は、他者をも自己の中に取り入れていることだったのである。
　主体性とは、同一性による他性を包み込むことで私（自己）が現われるのである。もともと、私などというものはない。他者によっ

て私なるものがつくられるのである。絶対的な差異としての他者は、自己の中で矛盾することになる。主体はすでに他者をはらんでいるとすれば、感受性として生起しているともいえる。つまり、能動的な思考としての主体性に先立ち、感受性としての受動性が他者と結ばれているのであるとレヴィナスはいうのである。このことをレヴィナスの表現で言えば次のようになる。「いっさいの受動性よりも受動的な受動性」としている。

このことは主体性としての自己同一性は、能動的な運動である反面、きわめて受動的な面を内包していたということである。つまり、能動性とは世界を自己の内に取り込むという意味の運動性、自己中心性のことである。一方、受動性とは、それに先立って、身体で感じる感受性は極めて受動性なのである。ということは、私たちは身体を基体として持っている以上、主体性としての精神に優先しているのである。その身体は、息を吸い、パンを食らうという享受であると同時に、傷つきやすさという感傷性に曝されいるのである。それが身体性であり、身体を持つということである。

身体は他なるものに曝され剥がれ落ちる。私の主体性に関わりなく「生は生に反して剥がれ落ちていく」老いは不可避であり、生とはそもそも「受動性の受動性なのである」。同一性はすでに破綻しているのである。自己との差異化とは、身体と精神の差異であり、身体はいつの間にか劣化し老化し朽ち果てていく運命にある。「生はそれ自体から剥がれ落ちていく」のである。身体はすでに受肉されている他性である。他者たちである。神の領域に属するという意味できわめて形而上学的なのである。

「私は自分の身体に結びあわされるに先立って、他者たちに結び付けられている」（熊野214:176）のである。

◆あることからあるものへ

レヴィナスは、死とは他性であると言った。「死の経験は同時に経験する主体の消滅である以上、死という他性は絶対的な他性であり、〝全面的な他性〟である」（熊野2014:82）つまり、すでに、私という存在そのものに「絶対的な他性」を有しているのである。私という同一性を破綻させるのが他性であり、他者であり、世界である。「裸形で貧しい身体」は世界によって養われている。世界は意識によって意味づけられる前に、身体を養うためにある。世界や他性によって生かされているという前提で、意識は瑕疵づかれているといえないか。

意識はまるで世界を折檻するかのように主体は感じる。同一性というマジックに翻弄される。しかし、同一性という運動までも世界によって瑕疵づかれているのである。しかし、時にこの同一性は、自己の制御を乗り越えて暴走する。世界に包まれていると同時に、世界を包んでもいるのである。この暴走によって、世界は破壊される。破壊された世界は「逆対応」のよって私に降りかかる。たとえば自然の破壊は、温暖化をもたらし、生物に悪影響を与えるなどがそれだ。

レヴィナスは、身体は世界から「無償の贈与」を受けているという（前掲104）。味わうことを味わい享受していることを忘れている。世界は単にあるという始原的なものを忘れている。享受の幸福は「憂い」を有しているのである。人は大気によって、食べ物によってつまり、始原的なものによって生かされているのである。享受されている世界を生きている以上、労働を必要とする。目から手に身体は移行する。手によって世界をつかむことで、世界そのものを創り出すのである。

身体とは欲求を満足させる運動である。それは空腹を満たし欠如を満たす行為である。しかしそれは他方では、外部性をいったん否定する行為である。世界の否定、他者の否定である。そのことで世界の一部が私のものになっている。その限りでは、同一性は「欲求が同一性の最初の運動」なのである。同一性は世界を他者を一旦否定して取り込んでしまう。労働を介しての欲求の充足も基本的には同じである。しかし、その資源性の否定によって一時充足される欲求は、すぐにまた欲求が頭をもたげる。空腹は満足されることはない。

そこには永遠の満足はない。常に自己は不安を抱え、世界に対して「無限の渇き」がある。それをレヴィナスは「渇望（desir）」といった。支配できない他なるものであり、それが「他者への憧れ（desir）」なのである。絶対に支配できないもの、自己からはみ出るもの、自己を否定するものだからである。かくして、二重の意味で他者は自己に襲い掛かる。それは、死と他者からの否定である。

「あること」とは身体を基体とした身体であり主体性である。その「あるもの」は非常に不安定なうつろいの中で存在しているにすぎない。それは「あるもの」からのなんらかの不安であり、否定である。あるいは「憧れdesir」でしかないかもしれない。なぜなら、常に自己からはみ出るものだからである。自己の手に負えないという意味で「渇望」でしかない。だからこそ、その間を埋めるものとしてケアという行為が必然として人間にそなわっていたと言えるかもしれない。

◆存在することから存在するものへ

レヴィナスは「存在することから存在するものへ」を著わした。次の一文は大変面白い表現である。「身体は傷つきやすい皮膚で覆われ、ほんのすこしのことで傷を負ってしまう。身体とはそれ自体としては一つの欠如ではないだろうか。じっさい身体として存在していることで私は、いくつもの必要（ブゾワン）に、たとえば衣服や住居の必要に迫られる。裸形の身体は暑さや寒さに曝されているからだ。欠如としての身体はまた、飢え渇く。身体である私は、こうしてさまざまな〝欲求〟（ブゾワン）を抱くことになる」（熊野2014:113）

存在することとはそもそも何か。レヴィナスは主体性としての自己と、客観性としての他者という視点で常に存在を意味づけようとしている。つまり、ヘーゲルの「我思う故に我あり」という主体性こそが存在することの前提に立っているのである。その最たるものが、身体であり「裸形」である。身体こそが「裸形」として世界の最前線に立っているのである。その身体は常に欲求（ブゾワン）の世界である。ゆえに、「欠如としての身体」だといえる。常に充足を求めているのである。これで良しとする満足は一時に過ぎない。しかし、この一時にしろ、他者という世界は消滅する。主体性が世界を折檻するのである。自己中心性が幅を利かせるのである。世界のあらゆるものは、自己中心性によって、自分の都合のよいように自己同一化されるのである。

存在することとは、つまり、自己同一性そのものである。世界の中心はまさに自分の中にあるという考えだ。そのことが、存在するものへとどのように変容するかがレヴィナスの主要な課題として問われているのである。しかし、身体の欲求はその都度充足されるにもかかわらず、あくまでも一時であり、充足することはない。満たされない渇きのような永遠性がそこにあるのではないかにレヴィナ

スは注目する。それこそ充足されない欠如である。つまり、不在がそこに横たわっているとみるのである。つまり、もともと無いものをもっている。常に無限を求めるエンドレスの世界である。

レヴィナスはそれを「渇望（desir）」または「憧れ（desir）」といった。常に欠如がそこにある、もはや、欲望（ブゾワン）の世界を超えて永遠性がそこにある。永遠に満たされない渇望であり、それが憧れなのである。いうなれば、有限としての身体のうちにある無限性（渇望）なのである。欲求されるもの、たとえば果実は、身体の欲望のうちに取り込まれ（支配され）消費される。つまり欲望とは支配でもある。しかし、渇望は常に満たされず、「渇望のひき起す」、支配の対象にならない。つまり、そこには「他なるもの（他者）」が存在するからであるといえるのだろう。

「存在するもの」を内に秘めているのではないだろうか。つまり、存在することは存在するものなのである。ただし、レヴィナスは欲求から渇望への変容をいいたかったのだろうか。欲望は渇望を内包していないか。存在すること自体が存在するものを内包してはいないかということである。他なるものが自己の存在そのものにあるのではないだろうか。

◆身体と精神の矛盾的自己同一

身体と精神についてキリスト教では自然的生命（ビオス）と人格的生命（ゾーエー）に分けて考えている。以下次のように言っている。

「それで、わたしたちはいつも心強いのですが、神を住みかとしているかぎり、主から離れていることも知っています。目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいるからです。わたしたちは、心

強い、そして、身体を離れて、主のもとに住むことをむしろ望んでいます。だから、体を住みかとしていても、身体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれるものでありたい」（『コリントの信徒への手紙』2.5:6-9）

身体を住みかとしている「外なる人」と、こころを住みかとしている「内なる人」の二重性を生きている。外なる人はやがて衰え朽ちていく。見えるものはやがてはなくなっていく現実に対して、見えないものは永遠性を有している。このように内と外との自己矛盾、自己分裂の中で生きているともいえる。しかし、身体を住処にしている以上その分裂は、常に自己中心性に向かう。この自己同一性の力によって精神は安定を保っていると言える。しかしそれは、常に人格的生命を宿しながらも、自然的生命の中で生きていることとなる。

西田はこの身体と精神の関係を「絶対矛盾的自己同一」といった。身体を有、精神を無という2局の対立した世界で表し、有限と無限の世界観で「善」を追求したともいえる。さらに西田は、「純粋経験」という、無とも有ともいえない未分化の場所を想定した。この未分化の場所こそ、直感の世界としたのである。直感の世界とは目という身体の一部でありながらも、意識がはたらかない以前の状態で、純粋にものを見る見方である。

つまり、身体的にものを見ていることは、瞬間的に精神世界の入り口に立つことである。その精神世界の入り口は、まさに、意識化される以前の状態を指す。身体的に見るとは物となって見ることである。自然的生命である身体が、自然的個物を見ているということは、ともに、自然的世界の中で、つくりつくられるという逆限定の世界である。なぜなら、自然的生命である身体は自然的世界によってつくられたものである。そのつくられたものが、意識を介してつ

くられたものを取り込む。ここに包み包まれる関係性が成り立つのである。

瞬間の世界においては、自己の有（身体）と無（精神）は未分化の世界であり、息でいうところの呼と吸が無意識のうちに連続して動いているにもかかわらずに、瞬間的に見れば、呼は呼であり続ける。しかし、連続的運動の世界では無意識のうちに一体化している。矛盾しながら同一性を保っていることになる。呼は吸を包み、吸は呼に包まれてある。また常に逆限定が起こっていると言える。

このようにすべての世界は、つくりつくられ、包み包まれてある。人間が存在しているかいないかは、基体から見れば確かに存在しているが、世界(自然）と一体になっていることがわかる。包み包まれる関係である。自然からつくりつくられる関係でもある基体（身体）は、意識との関係においても包み包まれる同一性を保つ。眼球（身体的自然）は世界の窓であり、意識と身体が行き来している。これがまさに「身体あって精神がある」ゆえんである。有限（自然）を持ち無限（精神）を宿しているともいえる。

目を介して、見えるものと見えないものが逆限定している。朽ちていく身体は、自身の精神も同様に朽ちていかざるを得ないが、世界（他者）によって見えないものが包まれ包む関係性を有し、さらにいえば、他者によってつくりつくられる関係を有している。ケアはケアすることにとってケアされているという逆限定作用がはたらく。包み包まれる関係を有いしているのである。それは、あくまでも動的に存在している自然的生命は、人格的生命によって他者と包み包まれる関係にあるからこそ、有限性であり、無限性の可能性を有していると言える。そこにケアという他者の支えが、無限性の端緒となっていることを自覚するのである。

◆おわりに〜あることからあるものへ

「人間とはどれだけわずかなものによって生かされているのか」という命題こそがケアの本質であるのではないか。それは、どれほどまでに人間とは偉大であり、かつ微小な存在なのかを物語るものである。パスカルがくしくも言った「人間とは考える一本の足にすぎない」と。それは、人間は宇宙に比べれば微小で儚い、しかし、宇宙とは何かを知っているが宇宙は何も知らないといった意味である。しかしこのわずかな違いこそ人間を人間たらしめたのである。宇宙から見れば人間などわずかな水蒸気で簡単に殺すことができる。

存在とは存在の「あり・がたさ」だと熊野は言う（熊野2014:53）。「あり・がたさ」とは有難がたさであり、あること自体がいかに困難かを言い当てているのである。「なぜ無でなく、むしろなにものかがあるのか」（前掲53）というほどに稀有なことなのである。身体は「動的平衡」のうちに常に運動体として細胞が代謝を繰り返して維持されている。この代謝という運動がなくなればそれは無であり死である。しかもその代謝は徐々に劣化しやがて死に向かうという宿命を背負っているのである。

まさに人間の存在は「振動しながら宙づりになっている」という在り方で存在しているのである。振動とは基体の「動的平衡」状態をさす。宙づりとは存在根拠がないことをさす。あえて存在根拠をいうなら両親から生まれたといえるが、その両親の両親のそのまた先のたった一人の人類の祖先までたどるとどうだろうか。はたしてどこから来たのかわからないといえないか。ハイデガーは人間を存在者でなく現存在といった。その意味は、まさに、現在進行形で存在しているという意味である。

西田はこれを「絶対矛盾的自己同一」とよんだ。つまり、身体はミクロで見れば、細胞の消滅と生成を繰り返して自己同一的に一（基体）として身体性を保っている。多にして一である。無にして有でもある。死にして生である。こうして絶対矛盾の対立概念は自己同一によって秩序を保つのである。これは、自己と他者との関係でもあり、自己と世界との関係でも成り立つ。この関係を「包み包まれる」関係、または、「つくりつくられる」関係とみた。
　つまり、人間とは「包み包まれ」て成り立つ、関係性の上に存在しているゆえに微小で儚い。身体と精神の関係も同様であり、レヴィナスの言う身体の疲労も精神に遅れてやってくる。ゆえに、精神（主体）は常に身体（定位）によって遅れてやってくる。それは、存在を意識するとは身体を意識しなければならない。意識する上に遅延があり、遅延ゆえに「躊躇」があるとした。「躊躇」とは一つの不安である。主体であるはずの自己は、基体である身体に規定されているがゆえに、「逆対応」が起こっているのである。
　西田はこの運動のただ中にある間を場所と位置づけ、その場所を「絶対矛盾的自己同一」の場所としたのである。デカルトのごとく主体は世界をわがものとするという理性の力を誇示した。しかし、そこに、身体という矛盾した基体に規定され包まれ、また世界から包まれ、包む関係の中で成り立っていたというべきである。身体は疲労するが、精神は疲労しないか。基体に見事に翻弄されていることに気がつく。世界に包まれ、また、世界を包むことで生かされながら生きている関係であると言える。そこにこそ私という存在が「どれだけわずかなものによって生きているか」ということが理解できるのである。そこにこそケアの本質がある。ケアとは存在の「在り難さ」を「包み包まれる」ことの行為だったのである。

〈引用・参考文献一覧〉

・浅野順一著（1978）『ヨブ記』岩波新書。
・イーグルトン、有泉他訳（2013）彩流社。
・池田善昭・福岡伸一（2017）『福岡伸一、西田哲学を読む』明石書店。
・岩波書店編、塚本虎二訳(1987）『新約聖書　福音書』岩波文庫。
・岩田靖夫(1997)『神の痕跡』岩波書店。
・岩田靖夫(2003)『ヨーロッパ思想入門』岩波ジュニア新書。
・岩田靖夫(2005)『よく生きる』ちくま新書。
・岩田靖夫(2008)『いま哲学とはなにか』岩波新書。
・岩田靖夫（2014）『ギリシャ哲学入門』
・上田閑照（2000）『私とは何か』岩波新書。
・上田紀行(2005)『生きる意味』岩波新書。
・サン・デクジュベリ＝浅岡夢二訳(2013)『星の王子様』ゴマブックス（電子版）。
・レヴィナス著、合田正人訳(2008)『存在の彼方』講談社学術文庫。
・レヴィナス著、熊野純彦訳(2005）『全体性と無限(上)｝』岩波文庫。
・レヴィナス著、熊野純彦訳(2006）『全体性と無限(下)｝』岩波文庫。
・レヴィナス著、原田佳彦訳（1885）『倫理と無限』朝日出版社。
・パスカル、西田浩太郎訳（2000）『パンセ』信山社
・トルストイ、中村白葉訳(1997）『民話集人は何で生きるか』岩波文庫。

・熊野純彦(1999) 『レヴィナス入門』ちくま新書。
・ドストエフスキー、中山省三郎訳 (1975) 『カラマゾフの兄弟』角川書店。
・ヘルマン・ヘッセ、高橋健二訳(2014)『ピーターカーチンメント (郷愁) 』新潮文庫。
・西田幾多郎 (1999) 『「善の研究』』岩波書店。
・藤田正勝(2015)『西田幾多郎』岩波新書。
□V□フランクル著、池田香代子訳 (2004) 『夜と霧』みすず書房。
・本田哲郎(2015)『釜ヶ崎と福音』岩波現代文庫。
・ハイデガー著、原　佑・渡辺二朗訳(2013) 『存在と時間III』中央公論。
・マルティン・ブーバー著、上田重雄訳(1979)『我と汝・対話』岩波文庫。
・メイヤロフ著、田村真・向野宣之訳(2011)『ケアの本質』ゆるみ出版。

おわりに

草花や動物など自分で丹精込めて作ったものは独特の愛着がわく。それは自分の猫であり自分の花になる。なので、自分だけしかわからないとても大切なものになるんだ。

そういう意味では、大切なことは目に見えないんだ。とても大切な犬や猫だったりするんだ。だから、目に見えない他者は「憧れ」という一方通行の存在なんだ。